

防衛大学校同窓会機関誌

小原台だより



本 館

■防衛大学校校長の離任・就任

■海外派遣部隊の状況

- イラク人道復興支援活動任務を終えて山中 敏弘
- インド洋における協力支援活動に参加して村田 隆斉
- 「イラクへの玄関」の地で石田祥一郎

同窓会ホームページアドレス：<http://www.bodaidsk.com/>

メールアドレス：honbu@bodaidsk.com

新年のご挨拶



防衛大学校同窓会会長 佐伯 聖二

明けましておめでとうございます。国内はもとより、遙か故郷を遠く離れた海外で活躍中の同窓生の皆様、平成19年の輝かしい新春を健やかにお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年10月9日、北朝鮮が実施した核実験は、世界に驚愕と緊張を走らせ、孤立混迷を深める北朝鮮の救い難い現状を露呈しました。これは、北東アジアの戦略的バランスを大きく崩す結果となりました。台湾は、「安全保障報告」を刊行して中国の軍事的台頭を警告し、韓国は優柔不断の政策を続行する一方、イラク、アフガニスタンの戦後処理が十分機能していない中、米国では中間選挙で民主党が両院で過半数の議席を獲得する等、世界の安全保障環境は、混沌とし、厳しさを加えています。

折から、長年の懸案であった自衛隊の統合運用の態勢が確立され、内部部局の大規模の組織改編が断行され、防衛庁の省昇格問題と相まって、改革の時代に入っているものの、隊員の削減、限られた予算の中、現役会員の皆さんには、かかる環境を凌駕し見事にその重責を全うしているさまに、深く敬意を表します。

さて、同窓会は、昭和36年1月に発足以来、本年で46周年を迎えます。昨年、第50期の卒業生を迎え、会員数は2万1千人を超えました。この隆盛を皆様とともに慶びとするものであります。将来の会員数は、手元の試算によりますと、現在の情勢で推移すると仮定すれば、概ね2万3千人で飽和する結果になります。この1年間、こうした前提の中で、現在の国内外情勢に調和した同窓会活動の方向を尋ねた「在り方検討」の答申を踏まえ、同窓会の改革と運営に当たって参りました。年頭に当たって、その概要を具体的に申し上げ、今後の方向を見つめたいと思います。

組織の規模が拡大してきた同窓会の運営で、その会員の総意をいかにして意志決定に結び付けるかが大きな課題であります。従来の総会は、会員相互の懇親を狙いとし、案件に対する議決権はなく、本部の報告事項を了解するに止まっていました。今年は、総会は重要案件が生じた場合のみ招集し、会員の出席が不可能な場合は他の方法で意思を確認することとし、それ以外の案件については代議員会の規模を充実させ、その議決を得て、会の運営に当たることとしました。

次いでは、財政的な基盤を確立することが課題であります。財源の大部分は会員の会費収入に依存しておりま

す。この2年間、新入会員総員が会費を完納するという実績が続いていますが、これは関係各部の支援、努力に負うところが大きであります。さらに、母校との緊密化による目に見える支援協力が功を奏し、新入会員が同窓会の意義を認め同窓会活動に賛意を示したものと喜んでいきます。一方、財政を圧迫する要因として、弔慰があります。会員数が飽和する時点では、毎年700～800万円が必要となります。検討の結果、経過処置期間を設けて、70才以上の会員に対する弔慰の内容を簡素化しました。

会員数の増加に伴い、現役会員の絶対数も増加し、現役会員に対する施策が重要となります。現役とOBとの交流を深め、相互に親睦、啓発の機会を作為する施策を推進しています。各支部と近隣部隊（各駐屯地、基地ごと）に組織する現役会員地区支部）との接触を密にするため、両支部が協同して実施する事業に対する活動経費を助成し、さらには地区支部の新設を奨励しています。昨年、群馬地区支部が開設されました。

また、女子学生の1期生（第40期）が卒業後10年が経過し、その数300余名となり、女性相互の意見交換、親睦を通じての結束を図る必要が唱えられています。昨年、新たに女性支部を設立するため準備委員会を設置し、本年2月「桜華会」の名称で発足する予定となりました。

組織が拡大するに伴って、末端に至までに情報を確達させることは難しくなり、このためには、同窓会と各期生会との結び付きを強化することが不可欠となりました。特に、個人情報保護法の施行に伴い、個人情報の取り扱い、各期生会に依存することが最善の策となり、かかる業務に携わる担当者として業務幹事の指名をお願いし、当該役員と連携して管理に実を上げています。さらに、より緊密な情報交換の手段として、ホームページの開設を期待し、設定した期生会に対する開設支援を試行しています。

一方、同窓会本部の役員の選出には、苦慮していましたが、該当する期生会から役員の推薦を受け、優秀な人材を確保しながら円滑に業務を推進しています。現在、部長クラスは14期生、各担当者を15及び16期生にお願いしています。役員になって初めて知るその活動や母校との接触を通じ、同窓会の重要性を再認識し意欲的に取り組むボランティア活動として見事な成果を挙げています。

新しい期生会の発足については、防大2年生の時点及び卒業時の期生会開催の機に特別の支援を実施し、会の円滑な創設とその運営に協力しています。

卒業式には、学校長からお招きを頂き、毎年順番に1個期が招待されています（HCD）。昨年は7期生が当該期に当たり、約300人が参加しました。40数年ぶりに母校を訪ねる卒業生にとって、交差する思いが深く、また級友との久し振りの出会いに感激一入でした。出席した夫人も夫が学んだ小原台を初めて訪れ、改めて尊敬の念を抱いたとの所見が見られました。この意義を若い時代に感得させたいとの願いから、昨年は、卒業後20年目に当たる30期生が開校記念祭に母校を訪問する機会（ホームビジット・デイ：HVD）を初めて企画し、88組約170名が参加しました。中堅幹部として活躍の様子を、学生に知らしめたいとの願いと、二世の入学の動機付けとなればとの期待があります。

さらには、会員相互の懇親の場であるスポーツ等の交流、テニス、囲碁、ゴルフ大会を実施しています。いずれも、毎年1個期ずつ参加期が増え、昨年からテニスに引き続き、囲碁、ゴルフも2部制を導入しました。囲碁は、勝率による組み分けで、上位組2チームを入れ替える。ゴルフは、シニア部を分離、2日に分けて実施しました。いずれも厳しい戦いを通じて先輩・後輩の交流が深まっています。

防大50周年記念事業委員会から受け継いだMCI（Military Cyber Institute）事業（わが国の防衛に関する世論を正しく導くための情報を発信し、同窓生の経験及び知識を生かし、社会的貢献をする）については、準備委員会を設

置して検討しました。受託事業として、軍事関係の専門家の派遣、関連情報及び資料の紹介、各種資料の収集及びその電子化、関係図書の販売等が考えられますが、現時点では、これを実施するには専従員の確保、会の法人化、事業としての採算等の問題から大変難しいと判断し、これらの精神を生かしつつ将来に結びつけるものとして、自主事業を推進して参ります。MCIの管理運営組織として会長の下にMCI事業部を新設し、同窓会ホームページにMCIコーナーを独立して設け、情報システムを構築します。当面、専従者を置き軍事関連情報及び資料の紹介、軍事的知見保有者の紹介、後進のための貴重体験の記録、貢献志願者の登録等に当たります。

以上、昨年1年間、同窓会運営における主要課題とその結果について、簡単に申し述べましたが、関係する会員の献身的な努力により、所期の目的を達成することができましたことに感謝するしだいです。今年は、さらに先に答申された「同窓会の在り方検討」の長期的な措置事項の検討結果が提出される予定であり、同窓会の更なる発展を目指して、微力ながら努力して参る所存です。皆様には、各方面における同窓会の事業、行事に万障繰り合わせて参加頂き、その活動の実を上げられますよう、お願い致します。

最後になりましたが、わが国の平和と繁栄を祈念しつつ、同窓生会員の皆様並びに御一家の益々のご発展をお祈り申し上げ、新年の挨拶と致します。

目 次

会長の年頭ご挨拶	2
防衛大学校学生教育を終えて	4
防衛大学校校長就任にあたって	5
新たな統合運用体制の発足にあたり	6
海外派遣部隊の状況	
・イラク人道復興支援活動任務を終えて	8
・インド洋における協力支援活動に参加して	10
・「イラクへの玄関」の地で	12
海外で活躍する同窓生	14
防大女性同窓生OB会（桜華会）の発足	16
防大50期生に聞く	
・幹部候補生学校修了所見（陸）	18
・防衛大学校50期生として（海）	19
・小原台での青春を振り返って（空）	20
就職援護最前線で活躍する同窓生	21
小原台は今	
・西原 正校長の離任	23
・五百旗頭 真校長の就任	23
・馬場順昭副校長・戸田量弘副校長の就任	24

・校友会活動等	25
全日本カッター競技会、学生ヨット世界選手権	
韓国海軍士官候補生とのスポーツ交流	
平成18年度運動系校友会活動結果及び部員状況	
同窓会事業	
・顕彰碑献花式	27
・防大卒業留学生との交流	27
・ゴルフ／囲碁／テニス	28
・ホーム・カミング・デイ（HCD）／	
第1回ホーム・ビジット・デー（HVD）	29
・MCIの平成18年度の現状について	31
期生会だより	32
4、6、7、13、16、25の各期生会	
同窓生アラカルト（不登校の若者と共に）	36
支部だより	38
九州、広島、岡山、関西、北陸、東北	
会計報告	43
同窓会本部・支部等役員紹介	45
期生会長・代議員紹介	46
お知らせ	47

防衛大学校学生教育を終えて

前防衛大学校長 西 原 正



●変貌を遂げた小原台

平成18年3月末に6年間の学校長任務を終えた。この間、第45期生から第50期生までの6期生を卒業させたので、約2,400名の防大生を輩出したことになる。感無量である。

防大はいつの時代にも変貌しているが、私の学校長時代における顕著な変化は開校50周年を記念して、平成14年に本庁舎をはじめ、講堂、図書館などの中央部の建物が新装されたことである。これで防大のイメージは数段向上した。この建て直しはその後も続いており、学生舎が平成22年には従来の8棟から4棟に変わる予定である。

この開校50周年を記念した平成14年秋の開校祭に小泉総理をお迎えし、また過去6代の学校長ないしはご親族をお招きして記念式典をグラウンドで主宰することが出来たことは、私にとっては大変な名誉であった。その日はたまたま秋晴れで素晴らしい日であったので、本当にいい思い出になっている。

●開かれた防大に

私は学校長になる前の23年間に小原台で教授をしていた経験から、防大を出来るだけ開かれた大学教育の場にすべきだと感じていた。学生には、「よき武人たるものは、よき社会人であれ」と説くが、学生が「よき社会人」の何たるかを知らないでは意味がない。このため、冷戦後多く受け入れることになった留学生（10カ国位から60名余り）への教育や防大生の海外士官学校短期研修などを充実させるよう努めた。また全学生に対する課外講演に在京の主要国大使や外国軍指導者、有識者を招いたり、海外の士官候補生を招いて国際士官候補生会議を充実させたりした。私も「全学生は卒業するまでに2回は海外に行くこと」と事あるごとに説いていた。そして「日本しか知らない者は、日本をも知らない」という表現を用いて、学生への講話を行った。「いずれ自分も海外派遣の命令を受けそうだ」というのが防大生の常識になった。

また外部大学生との交流も少しずつ拡大させた。日米学生会議の日本人学生が一日防大を訪問して防大生と交

流をするようになっていくし、一般大学の学生を招いて安全保障問題を討議する学生シンポジウムを開催するようになった。また優秀な四学年生には他大学の授業を聴講することも試行的に始めた。外部の大学生も、防大生を見て「自分たちと変わらないな」とか「国の将来を真剣に考えている若者がいることにショックを受けた」などという所見を残していた。

●防大生のライバルは外国の士官候補生

防大生はじつに忙しい。そのため、防大生はゆっくり考えたり、読書をしたりする余裕がない。幹部自衛官としては、限られた時間に与えられたことを済ませるという訓練も必要であるが、読書の習慣も重要である。パソコンの普及は学生から読書の時間を奪っている。

私は、防大生全員が日本の近現代史をアジア諸国との関わりにおいて学べるよう教科を編成し、また教養科目の時間を増やすように努めた。さらに情操教育の一環として、新しく出来た講堂を利用して、クラシック音楽のコンサートも始めた。

私は防大生に「諸君のライバルは、国内の大学生ではない。ライバルは外国の士官候補生だ」ということをよく説いた。学生たちがその自覚を持って勉学をし、教養を身につけ、徳操を養い、強靱な精神力を持つ努力をすべきだと考える。なによりも、将来の幹部自衛官は国際舞台で活躍できかつ国防に燃えたリーダーになって欲しいと願っている。

●「任重く道遠し」

6年間の学校長の仕事は、横初代学校長がいみじくも遺された「任重く道遠し」という言葉が当てはまる。しかし私は多くの人たち、とくに同窓会の皆様に支えられたことに心から感謝している。自分の母校（京大）の校歌よりも防大の学生歌にすっかり馴染んでしまった。これからの第二の人生においても、学生歌をしばしば口ずさんで元気にやって生きたい。「あしたに勇智を磨き、夕べに平和を祈る。礎ここに築かん、あらたなる日の本のため」と。

新学校長のあいさつ

防衛大学校長 五百旗頭 真



去る8月1日に第8代防衛大学校長を仰せつかりました。勝手気ままな一大学教授から、もっとも規律を重視する防大に転じて、組織文化の違いに面くらうことの多かったこの2ヶ月でした。

他方、ある種のなつかしさを覚えるところもあります。それは私が中高時代をおくった神戸の六甲学院という学校に、本校とあい似たところがあったためでしょう。受験校としてはもの足りないが、真理・誠実・献身といった課題を校長自らが生徒に打ちおろし、訓育を重視するスパルタ教育で知られる変わった私立校でした。なかでも訓練が厳しく団結を重視する山岳部に属していた私は、ここ防大の教育・訓練を見るにつけ、原始に帰ったようななつかしさも感じるわけです。

その後、自由な精神を最重視する京都大学に学び大いに開放感を覚えてその気風を好み、この社会でもっとも規律乏しき学者・知識人の世界に身を置いて参りました。そんな中で歴史研究に携わりつつ、現在進行形の歴史に対する責任を意識する学者のひとりにいつしかなっていたように思います。対外政策を中心に社会に発言し、求

められれば政府に意見もする、国と国民の認識をいささかでも支えるのが、パブリックに対する識者の責任と信じるようになりました。

このたび防大校長となったことは、パブリックへの一般的責任から安全保障人材育成という特定分野への責任へと重心を移行させることを意味します。時あたかも、誰でも痛感せざるを得ないように、近所で北朝鮮が核とミサイルを振りかざして立ち回る事態は、安全保障が観念と神学の世界から現実の対処の問題へと迫り来たことを示しています。

そういう状況にあればこそ、将来の幹部自衛官が錯綜する現代世界にあって、精神と認識のバランスを失うことなく自己形成を遂げることは、格別に難しくかつ大事なことです。私は防大校長としてそれに関与できることを誇りに思います。すでに9月より2,000人の全学生に対し1時間半の講話を始めております。現代世界を生き、安全保障を担う難しさを学生自身がこなす以外にありません。しかし学校長と教職員は苦楽を共にして学生たちの自己形成を支えたいと念じています。



新たな統合運用体制の発足にあたり



前統幕僚長 先 崎

内外の大きな期待を担いつつ、自衛隊の新たな統合運用体制がスタートして早や1年近くが経過した。

案ずるより産むが安し。新体制の発足までに結論が得られず、調整未了のまま持ち込んでしまった検討事項も一部あったが、始まってみればそれなりに組織は機能し比較的順調な新体制の船出を迎えられたことは幸いであった。

申すまでもなく統合運用は自衛隊発足以来、諸先輩方によって検討され蓄積されてきた、いわば制服自衛官にとって積年の夢だったとも云える。その延長線上にあって、自衛隊を取り巻く環境の変化、特に近年における新たな脅威や事態の多様化に伴う自衛隊の役割の増大と国民の期待感の高まり、並びに自衛隊自身の国際貢献活動等による経験の積み重ね、訓練による練度の維持向上等を背景に、次第に統合の機運も熟しつつあった。そうした中H14年4月、当時の中谷防衛庁長官の直接指示により本格的検討に着手、爾来約4年の歳月を重ね今日の実現に結びついた事をご承知の通りである。

さて新体制移行後の私の統幕僚監部における勤務は、わずか半年足らずで、いわば統合の種を蒔いたに過ぎない。したがって、現状を分析・評価するには実績不足ゆえ、これまで取り組んできた概要等につき私見を述べたい。

翻って、統幕僚会議議長に上番したH16年8月は新体制に向けての諸準備も佳境に入りつつあった時期であり、さらに統幕僚監部の新設等、新体制関連事業を含むH17年度概算要求の時期とも重なっていた。したがって、1年半後に開始される新たな体制の幕開けが現実味を帯び、緊迫感と共にある種の危機感を抱き始めていた。その当時私の主要関心事は、いわばD-dayとも云うべきスタートの日を睨みつつ各種検討事項の収斂を加速させると共に、「統合の向かうべき目標・方向」を明示することにあった。今回改編の特色の一つは、陸海空各幕僚監部がそれぞれ所掌している各自衛隊の運用を継続したまま新体制に移行し、同時に新設される統幕僚監部がこれら全ての運用責任を引き継ぐ事にある。したがって運用の中断防止の観点から特に先行的な人事配置と陸海空各幕の運用担当者を兼務して統幕に勤務させる処置が必要であった。

そのような中H17年1月スマトラ沖大地震に伴う国際緊急援助隊の派遣は当時検討中の統合運用のあり方を現地で試行する場となり、これを最大限活用した。具体的には統幕メンバー約10～20名からなる「統合連絡調整所」を陸海空派遣部隊に先行して現地タイのウタパオに開設し、現地ニーズ等の情報収集、国連・派遣各国・インドネシアとの調整等により支援活動の大枠を概定、自衛隊の派遣部隊が到着しだい直ちに活動に着手出来るよう基盤を整える役割を付与した。これは統合運用の一形態である、統幕の統・調整下で実施される「陸海空各自

衛隊の協同による運用」のモデルケースともなった。このように約1,000名の陸海空隊員による約2ヶ月に及ぶ派遣活動の経験は、組織にとっても隊員個人にとっても本格的統合運用を目前にした先取り体験であり、事後の準備を大きく加速させたと言える。年度末に統合運用が開始されるH17年度早々からは統幕に「統合運用推進本部」を設置し、「統合ホームページ」の開設、統幕スタッフによる部隊現況把握・意見交換、統合高級幹部会同の実施等、統合機運の醸成を図った。

年が明けH18年2月実施した日米共同統合指揮所演習（キーンエッジと呼称）を準備の最終チェックの場と位置づけ、検証・評価機能を充実した態勢でこれに臨んだ。その頃から陸自イラク派遣部隊の撤収がクロズアップされ始め、移行への準備と同時に新体制直後に予想されるイラク撤収作戦という統幕にとって新たな課題が浮上してきた。したがってこの頃から準備の軸足を陸幕と一体となったイラク撤収作戦計画の具体化に置くことになった。

そしてH18年3月27日は我々にとって歴史的な第一歩を踏み出す記念すべき日となった。桜花爛漫の市ヶ谷台上、庁舎A棟大講堂において歴代防衛庁長官26名の参列を得て式典を挙行、引き続き駐屯地体育館にて全国各地からの陸海空隊員と共に、隊員手作りによる統合の門出を祝った。

新たな体制スタート後まもなく、6月にはインドネシア・ジャワ島中部地震に伴う新統幕（統幕僚監部）にとって初の国際緊急援助隊派遣任務、7月には北朝鮮による弾道ミサイル発射事案対処、及び陸自イラク派遣部隊の撤収等、次々に統合運用の場に直面した。したがって当面の対応に追われるあまり現職を離れるまで、後を振り返る余裕がなかったのが偽らざる事実である。いうまでもなく、このような統合運用の焦点に立ってリーダーシップを発揮する各級指揮官等の多くは防大出身者であり、統合時代の到来を先取してきた防衛大学校の果たすべき役割は、今後益々大きくならざるを得ないであろう。

統合運用も緒についたばかりであり、在日米軍再編との整合、国としての統合運用基盤の整備、人材育成等、取り組むべき課題も多く、又各国軍の統合の現状を見るにつけ未だに見直しが続いている等、これまで以上に乗り越えるべき障壁が予想される。このため、与えられたそれぞれの運用任務に最適の態勢で臨み、試行錯誤を重ね、たえず統合のあるべき姿を求め充実発展してゆくことが望まれる。そのプロセスそのものが国民の期待と信頼に応え、日米同盟を基軸とした我が国の抑止態勢の強化にもつながり、ひいては周辺地域のみならず世界の平和と安定に貢献してゆくことになろうと思う。

自衛隊の統合運用体制の前途に対する内外の期待は限りなく大きい。

◆ 海外派遣部隊の状況 ◆



第10次イラク復興支援群全員



洋上補給と護衛（補給艦：おうみ、護衛艦：いなづま）



アリ・アルサレム基地展開中のC-130

イラク人道復興支援活動任務を終えて

第10次イラク復興支援群長
陸28期 山中 敏 弘

平成18年7月25日早朝、第10次イラク復興支援群帰国第3波約200名を乗せたチャーター機が、羽田空港に着陸しました。空港ロビーでは、先崎統合幕僚長（当時）、森陸上幕僚長をはじめ多くの皆様に出迎えて頂きました。600名の命を預かる第10次イラク復興支援群長として、大変嬉しく、肩の荷がおりる瞬間でした。まずは、準備訓練から帰国までの間、全国の防衛大学校同窓会員の皆様から頂いた暖かいご支援・ご声援に心から御礼申し上げます。

羽田空港から都内を車両で移動中、窓から見える木々の緑や整然とした街並みがとても美しいと感じました。そして、防弾チョッキを着ることもなく、景色を楽しみながら安心して車両に乗っていられることに、多少の違和感を覚えるとともに幸せを感じました。「この美しく平和な国は絶対に守らなければならない。」我が国の平和と安全を守る自衛隊、そして自衛官としての使命の重要性を改めて確認した次第です。

さて、我々第10次イラク復興支援群は、5月6日、第12旅団司令部のある相馬原駐屯地において隊旗を授与されました。盛大な壮行会の後、第1波約150名は、家族や同僚に見送られ、バスで朝霞駐屯地に向け出発しました。県警が先導してくれていましたが、奇妙なことに気付いたのです。信号機に引っかからない、タイミングよく青になる。よく見ると、各信号機に警察官がいて、我々のバスが通過するときに手で青にしているのです。また、交差点で通行規制を行い、我々の前には車一台走っていないという状況でした。このとき、日の丸を背負って任務に赴くことの重さを改めて感じました。「国家をあげて我々を応援してくれている、頑張らなくては。」



地元部族長との懇談



アル・アスマイ小学校訪問

現地に到着し、まず驚いたのは、やはり「熱さ」でした。5月上旬だというのに、気温は既に40度を軽く超えています。事前に聞いてはありましたが、体が慣れていないこともあって、想像を絶するものでした。考えてみれば、ほんの2ヶ月前は、零度以下の北富士演習場で訓練していたのです。派遣間における最高気温は50度、直射日光下で60度でした。風が吹くと、低温のドライヤーを当てている様な感じです。この時期、雨は全く降りませんが、月に数度砂嵐がやってきます。砂嵐が来ると、世界が白又はセピア色になり、ゴーグルとマスクなしで外に出ることはできません。一番凄いのが夜中に来て、朝起きると、シアタールームに使っていたドラッシュ天幕が50m吹き飛ばされ、私が寝ていた耐弾施設に覆い被さっていました。この様な過酷な気象条件下で、隊員は黙々と任務を遂行していたのです。

5月26日、第9次群長小野寺1佐から指揮転移され、第10次群の復興支援活動を開始しました。この際、「笑顔・真心・感謝」を復興支援活動のスローガンに掲げました。「まず我々の復興支援活動に理解を示し安全確保に協力してくれるムサンナー県の方々に感謝をしなければならぬ。そして、日本で見守ってくれている家族や国民の皆様、我々の活動を支えて我々が居ない分まで頑張ってくれている隊員達に感謝し、これに応えるために、笑顔で真心のこもった復興支援活動しよう。」復興支援活動をしていて嬉しかったのは、住民が我々の車両を見て手を振ってくれることでした。特に子供達は、駆け寄ってきて「ヤバーニ！（日本人）シュ克蘭！（ありがとう）」と手を振ってくれます。イラクに来て良かったなと、充実感を覚える一時です。



サナア小学校竣工式

6月20日、日本政府の撤収決定に伴い、我々のオペレーションも撤収の段階に入っていました。回数は減りますが復興支援活動も継続しつつ、物品・車両の後送は計画通り順調に進みました。人員については、5波でクウェートに下げることにしました。この際、英・豪・米軍をはじめ多国籍軍に大変お世話になったのです。彼等は、我々が置かれている立場を非常に良く理解していて、「ここで何かあったら、陸自はこのような国際貢献の場に来られなくなるだろう。だから、陸自の安全な撤収は多国籍軍にとっても最重要事項だ。」と、数少ないヘリを優先的に割り当ててくれたのです。最終波がサマーワ宿営地を離脱する直前の24時間には色々な事件が起き、痺れるような緊張感がありましたが、豪軍は最後まで我々を支援してくれました。このような支援・協力のお陰で、全員無事クウェートに下がることができたのです。

平成16年2月に第1次群が派遣されて以来、第10次群が撤収するまで、延べ5,500人の隊員がイラクにおいて人道復興支援活動に従事しました。この間、医療技術指導を277回、公共施設の復旧・整備を133箇所行い、また、約53,500トンの水を供給（17年2月4日終了）し、ムサンナー県の人々が自立的に復興するための基盤を確立することができました。具体的な例を挙げますと、ムサンナー県の医療環境は悪く、多くの新生児が亡くなる状況でしたが、自衛隊の支援開始以降、サマーワ母子病院では、新生児の死亡率が約3分の1に減少しました。また、我々が撤収直前に完了した浄水所・送水管・ポンプ所等の給水システムの補修により、ムサンナー県民が生活に最小限必要な水を給水することが可能になりました。そして、36校の学校を補修することにより、ムサンナー県の子供達の修学環境も大きく改善されました。

日本の人道復興支援活動は、現地において非常に高い評価を受けておりました。我々の撤収に際して、ムサンナー県知事をはじめ各市・村長、部族長等からは、陸上自衛隊と外務省が行ってきた活動に対する感謝の言葉とともに、日本隊にはまだ居て欲しいという言葉頂きました。また、米軍をはじめとする多国籍軍、特に同じ地域で治安維持にあたっていた英・豪軍からも、我々の人道復興支援活動に対する賞賛の言葉を頂いたのです。こ



ルメイサ〜サマーワ間の水道完成点検

れらの言葉を頂く度に、第1次群から着々と積み上げてきた人道復興支援活動が高く評価されていることを嬉しく思うと共に、その活動に参加する一人として誇りを感じました。帰国後、我々第10次群がサマーワを撤収する直前に行われた世論調査によると、日本の人道復興支援活動に満足していると回答した住民は78.7パーセント（7月11日共同通信社発表）であったと聞きました。現地で活動している時も多くの住民に支持されているという実感はありましたが、改めてこの数字をみると、如何に我々の活動がイラクの人々に理解されイラクの復興に役立ったかを再確認でき、大変嬉しく思います。

2年半に及ぶイラク人道復興支援活動が成功裡に終了できたのは、派遣された全隊員が、イラク復興支援任務の意義と自己の役割を十分理解し、過酷な状況下で黙々と自己の職務を遂行したことによるものであり、敬意を表したいと思います。また、イラクそして日本の国民の皆様、陸海空自衛隊員、多国籍軍の支援と協力に感謝を申し上げます。

現在も、航空自衛隊はイラクにおける輸送支援活動を継続しています。また、海上自衛隊もテロ対策特措法に基づきインド洋において補給・輸送支援等を継続しています。更に、ゴラン高原において派遣輸送隊が任務を継続しております。これらの活動には防衛大学校卒業生が数多く参加していることでしょう。卒業生を含む派遣隊員の安全と任務達成を祈念したいと思います。



朝霞駐屯地での隊旗返還式（18. 7. 28）

テロ対策特別措置法に基づく

インド洋における協力支援活動に参加して



手前：洋上補給艦（おうみ） 遠方：護衛艦（いなづま）

「針路西へと波また波の～」小原台時代に隊歌演習で歌っていたインド洋、当時、実際に行くことになる海域とは、考えてもいませんでした。

平成18年3月14日、護衛艦「いなづま」（約180名）補給艦「おうみ」（約150名）の2隻をもって日本を出港し、前任のインド洋派遣海上支援部隊指揮官（第6護衛隊司令）から任務を引き継ぎ、約4ヶ月間インド洋派遣海上支援部隊として任務に従事して、8月7日、総員元気に帰国しました。就役1年の「おうみ」は初の、「いなづま」は、4年ぶり2回目の派遣となりました。

今回の派遣部隊には今までにない大きな特徴が2点ありました。その1つは、3月27日から統合幕僚監部の運用下、イラク人道復興支援特措法に基づく派遣等と並列に派遣されたこと。2つ目は、女性自衛官が初参加したことです。

今回参加した女性自衛官は、幹部2名（1名は、小原台出身）、海曹士14名の16名で運用、射撃、魚雷、通信、航海、機関、補給、衛生等あらゆる分野の特技員が配員されていました。出国前は、長期の厳しい環境下の勤務であるため、いろいろ心配していましたが、全くの杞憂におわりました。16名は、「おうみ」ぎ装（船を建造すること）当時から訓練された精鋭であり、インド洋デビューで「大和撫子ここにあり」と大活躍してくれました。通信機からは、聞き取りやすい音声で交話がなされるため他国艦艇、船舶からの応答も早く、諸作業の中にも女性らしい細やかな心遣いが感じられました。もっとも、陰で彼女達を支えていた男性隊員の努力も並々ならぬものがありました。

インド洋派遣海上部隊指揮官 海21期 村田 隆 斉

海上自衛隊は、2001年の9.11同時多発テロを契機として同年10月に成立したテロ対策特措法に基づき、同年12月以降、インド洋上でテロ防止のための海上阻止作戦に従事している米英艦艇を中心とした外国艦艇に対する、補給・輸送支援等を継続しています。

インド洋で活動している外国艦艇は、11カ国におよび、主としてアフガニスタンに対する海路からのテロリストの出入を防止及びテロリストへの武器、弾薬、麻薬、不正資金等の流通の遮断を任務として活動しています。

海上自衛隊の洋上補給支援は、これらの海上阻止作戦に従事している外国艦艇の作戦効率の向上に大きく寄与しています。

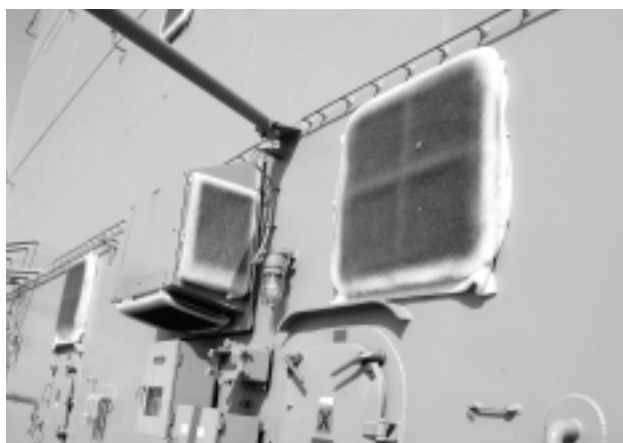
今回協力支援活動をしていた海域は、概ね沖縄と同じ程度の緯度でしたが、環境は、全く違います。それは、インド洋の特徴でもある砂塵、高温多湿、昼夜の温度差等であり、特に6～8月は最も暑い時期となります。

気温は、日中35度を越え、甲板上は照り返しで65度以上になっています。また、湿度も常時85%以上で99%ということもしばしばです。眼鏡を掛けている者は、上甲板に出たとたん一瞬にして眼鏡が曇り視界を失う状態です。

このサウナのような状況で、救命胴衣や防弾チョッキを着用し洋上補給等の甲板作業を数時間実施するためには、相当な体力と忍耐力が要求されます。



補給艦へのヘリコプター着艦誘導（女性自衛官）



砂塵対策用フィルターの汚れ

砂塵は砂漠から極めて細かい砂が遠く洋上まで飛来するものであり、黄砂の激しいものといえます。目に激しい違和感を覚える日もあり、機器についても防塵対策、入念な保守整備等細心の注意を払う必要があります。

洋上補給作業とは、補給艦の正横40～50mの位置に受給艦が付き、蛇管と呼ばれるパイプを渡し、その状態のまま、同進路、同速力で航行しながら、燃料、真水を供給するもので、高度な操艦技量と隊員の作業練度を必要とします。特に、言葉の違う国の艦と2～5時間並走しながら作業を実施するのは、なかなか大変です。さらに、作業実施海域は、国籍の確認がすぐにはできない小船舶や航空機が航行しており、洋上テロ等の不測の事態にも備え、護衛艦と艦載ヘリコプターをもって常に高い警戒態勢を維持しておく必要がありました。

このような厳しい環境の下、緊張感を保ちつつ、整齊かつ淡々と任務に就いているものです。

さて、艦内生活ですが、自衛艦の強点は、自己完結型のひとつの社会を形成しているところにあります。外の環境は異なっても、居住環境は日本にいる時と変わらず、

食事も日本食、米も半年分以上搭載していますし、冷凍品についても、最大最新鋭、の補給艦が十分な量を搭載しています。医療についても、3名の医官と病院に匹敵する設備を備えているため、不安はありません。

しかしながら、やはり遠く日本を離れ半年近い長期の任務となると、精神的なストレスは、計り知れないものがあります。このため、いろいろな配慮がなされ、年々向上しています。衛星回線を利用したメール通信、使用時数に制限はありますが衛星携帯電話、艦内郵便局、国内で実施していただける留守家族に対する説明会、ビデオレターの交換、艦内新聞の発行等がこれに当たります。これらの国内の家族等からの通信が隊員の大きな心の支えになっている訳です。

この夏、イラク人道復興支援特措法に基づく陸自の活動が成功裏に終了し、無事撤収しましたが、以来、海外における活動に対する国民的関心は、かなり薄れてきつつあるように感じます。しかしながら、インド洋においては、引き続き多数の国の艦艇が、テロ海上阻止の任務を続けており、海自も中東方面の国際情勢に細心の注意をはらいつつ、協力支援を継続しています。

海上自衛隊は平成13年12月からこれまでの4年半で、補給艦、護衛艦、輸送艦、掃海母艦延べ53隻（最大5回）、約10,000人の隊員がこの協力支援活動に参加してきました。支援回数も18年夏の時点で650回を越え、インド洋に展開するコアリションの国々が、テロとの闘いを継続するに、海上自衛隊の支援が必要不可欠の状況になっています。「日本が支援活動をしているから対テロ作戦に加わることができた国家もいくつかある。」と言われる程、各国から高い評価を得ています。

今回派遣に参加し、「外から日本を見ることで初めてわかる世界の中の日本」を痛感させられた任務でありました。



もやい索発射（女性自衛官）

「イラクへの玄関」の地で

第9期イラク復興支援派遣輸送航空隊副司令 空27期 石田 祥一郎

私は、平成18年3月から7月までの4ヶ月間、航空自衛隊イラク復興支援派遣輸送航空隊の第9期要員として勤務する機会を得ました。陸上自衛隊の活動が脚光を浴びたイラク復興支援活動ですが、この機会に航空自衛隊の活動を紹介すると共に、この勤務を経て感じたことを少し皆様にお伝えしたいと思います。

1 イラクへの玄関

航空自衛隊はクウェート国のアリ・アルサレム空軍基地に約200名からなるC-130輸送機部隊を展開させています。このアリ・アルサレム空軍基地には、「大家」であるクウェート空軍は別として、イラクの復興を支援する国々がそれぞれ部隊を展開させており、まさに国際色豊かな「多国籍軍」の基地となっています。我が航空自衛隊はC-130という輸送機をこの基地に展開させていますが、同型の輸送機を展開、運用している他国の部隊もあります。これらの活動の拠点となっているこの基地はわが国にとってのみならず、国際的にも、まさに「イラクへの玄関」としての役割を果たしていると言えます。



アリ・アルサレム基地展開中のC-130

さて、我々航空自衛隊の派遣部隊は、3機のC-130輸送機をもって空輸任務を行っています。その活動で特筆すべきは、イラクでの活動に必要な様々な空輸所要に対して、輸送が最も効率的に行われるように空輸計画の調整が行われる、ということです。勿論各国が運用する輸送機には様々な形態や運用方法の差があるので、各国はその調整に基づいた独自の運航計画によって輸送機を

運航することになります。しかし各輸送機の運航は常時モニターされており、非常事態、例えば、運航している輸送機に何らかのトラブルが発生しイラク国内で不時着したような場合、直ちに最寄りの基地や駐屯地から救援部隊が駆けつける、といった対応が取られることになっています。

今我が国内では、自衛隊の「統合運用」について態勢が整いつつあり、陸、海、空の垣根を越えた運用が期待されていますが、イラク復興支援活動にあつては、この運用の形態の一部分が軍種のみならず国を超えて行われていると言えるかも知れません。



C-130の整備風景

2 台所事情

私が勤務した派遣部隊の正式な名称は「航空自衛隊イラク復興支援派遣輸送航空隊」と言いますが、航空自衛隊ではこの他に、前項で述べた輸送計画を行う部門と、現地での連絡調整に当たる部門を別に展開させています。派遣要員の勤務期間は4ヶ月となっていますので1年間で3交替することになります。

航空自衛隊が派遣部隊を編成する上で悩ましいのが要員の選考です。イラク復興支援に派遣されるC-130輸送機を日本国内で運用する部隊は、ただ一つ、小牧基地にある第1輸送航空隊しかありません。つまり海外に派遣されるC-130輸送機部隊の中核となる要員は常にこの部隊から派遣されるのです。私が派遣された第9期の要員の中にもクウェートに複数回派遣された隊員がかなり含



要員交替の一コマ

まれておりました。彼らにかかる負担が大きいのは事実ですが、それぞれの強い責任感のもとより航空自衛隊が一丸となって彼らを支えるという態勢でこの派遣任務は粛々と遂行されているのです。

航空自衛隊では、上記のやむを得ない部署を除き、その他の部署の要員は全国から職域毎に選抜し逐次交替させる、といった方法で所謂「派遣要員」を交替させています。これに対し陸上自衛隊は、派遣に先駆けて新たに編成し訓練した「派遣部隊」をまるまる交替させており、両者のやり方は大きく異なっています。それぞれ一長一短があるでしょうが、派遣要員に対する事前訓練が十分に実施できる、という点では陸上自衛隊を羨ましく思えたこともありました。航空自衛隊の派遣要員に対する事前教育等は逐次改善されてきておりますが、今後とも活動の成果を反映しつつその充実を図っていくことが重要だと思います。

3 コアリション・メンバーであるということ

さて、3月から7月までの4ヶ月の派遣勤務の中で印象深かったのは、酷暑に代表される異国の環境といったものの他に、日本（自衛隊）がコアリション（有志連合）メンバーの一員として現地で活動していることの重みを実感できた事です。かつて日本のイラク派遣を促す米高官の発言に“Boots on the Ground”という言葉が使われたことは有名ですが、湾岸戦争時に多額の資金提供をした日本の評価が国際的にあまり高くなかったことに比べ、イラク復興支援における、まさに地に足の着いた日本の活動は、非常に高く評価されていると実感できました。これは参謀本部レベルや政府レベルといった次元の話ではありません。同じリスクを負って活動する現場の軍人同士の互いへの敬意と対等の視線から感じる事ができるのです。これは初めて海外派遣を経験する私にとってとても新鮮であり、また感動させられた事でありました。

これに関してはこんなエピソードもありました。陸自部隊が撤収した後の空自の活動について検討をしていた頃、多国籍軍や国連への空輸支援を拡大する為の準備としてイラク国内の飛行場調査を実施しました。私はその調査団の一員としていくつかの飛行場を訪れたのですが、訪問先の部隊で色々な質問や依頼をする我々調査団員に対し返ってきたのは、「全て問題ありません。支援可能です。なぜなら日本はコアリションメンバーの仲間だから。」という関係者の言葉でした。調査団としてこの返答に大喜びしたのは勿論でしたが、この時我々の胸に去来したのは、この我々に対する信頼と期待を裏切ることではない、という強い責任感でした。米軍を始め、多国籍軍メンバーと対等であるということは我々の目標とするところではありますが、対等であるということは同時に相応の責任を有するのだと言うことを改めて実感した場面でした。



飛行場調査で米陸軍兵士と

4 第2ステージへ

陸上自衛隊が撤収した今、航空自衛隊のイラク復興支援活動は、多国籍軍への支援強化と国連への支援開始という、所謂「第2ステージ」を迎えています。私はこの第2ステージの幕開け直前に帰国することになりましたが、航空自衛隊の果たしている役割とその責任は、以前とは比較にならぬ程大きくなっているのは間違いありません。その活動が華々しく報じられることは無いかも知れませんが、この「イラクへの玄関」の地でイラク復興支援派遣輸送航空隊が、国際社会の一員であることの誇りと責任感を胸に黙々と活動していることを知って頂ければ幸いです。

JMASが行う カンボジア「住民参加型地雷処理活動」 について



JMAS理事 古賀英松 (12期陸)

○はじめに

平成18年10月初旬、JMAS（特定非営利活動法人日本地雷処理活動を支援する会：Japan Mine Action Service、会長：西元徹也（防大3期）、理事長：土井義尚（防大9期））の行うカンボジア地雷処理活動の現場を見る貴重な機会を得た。JMASは18年6月からカンボジアにおいて「住民参加型地雷処理活動」を実施してきている。これは住民参加型の支援活動であり、現場の地雷処理作業隊員が若い女性であったり、地雷処理後のインフラ整備等の支援も行うような新しい発想の地雷処理活動であり、今回この現状を是非皆さんに紹介したいと思う。

○辺境の地バットアンバン州（地雷処理活動地域）の景況

地雷処理活動地域（以下サイトと略）はカンボジア西北部バットアンバン州の西の端、タイとの国境近くに位置する。バットアンバンのJMAS事務所からサイト宿泊所までは、舗装のない凸凹の山道で200キロある。車でざっと6時間、首都プノンペンのJMAS本部からは10時間を要した。現場を訪れたのは丁度雨季（6月～10月）の終わりの時期であるが、1日に1回はスコールの毎日であった。

バットアンバンの町を出てサイトにいたる間は荒涼とした光景が続いている。道路の両側所々に民家がみられたがその他は未開の地、山野が延々と続いておりその間に地雷の存在を示唆する標識がいくつも立っている。

1980年代始め頃からこの地域では当時のクメールルージュ、ポルポト軍がベトナムに支援された反ポルポト派に破れ逐次後退しながら北上し、この間経路沿いに大量

の地雷が使用され、遺棄された次第である。

サイトはバットアンバン州カムリエン郡タサエン・コミュニケーション地区である、5つの部落、人口5千人程度の集落からなる。住民の家屋は床が地上1～2m高床式、電気もなく人々の生活は文化的なものとはほど遠い状況であった。

○地雷処理作業について

作業隊の編成・装備であるが、作業隊は3個小隊で編成され、小隊毎に分散作業している。一個小隊は32名、そのうち小隊本部4名（小隊長、チームリーダー×2、救護員）、2個チーム（1個チーム×2個班、1個班は7名編成）から成っており、装備品としては小隊本部に指揮連絡用のオートバイ×2台、搬送用担架、通信機があり、それぞれの班ではオーストラリア製の地雷探知機を保有している。

処理作業に従事する隊員は現地の住民より予備を含めて100名を選抜し、女性対男性の比率は6対4である。

作業時間は、午前7時半作業開始、11時半から大休止・昼食、午後は3時で作業終了となる。

サイトはタイ国境に近く特にマラリアが発生し、現場でも最近2、3名の患者が出たと聞いた。

雨期の温度は30度を超え高温多湿により、じっとしていても汗を掻く程で衛生環境も厳しい。

作業中の万一の事故発生に際しては近くに適当な病院等はなく「ヘリ」にてプノンペン等の病院に搬送する事になっている。



地雷に関する啓蒙教育



とうもろこし畑で発見された対人地雷

○住民参加型による地雷処理活動（以下処理活動と略）

この活動の特色の一つは自分たちが住む地域の地雷に対して現地の住民から隊員を募集し6週間の訓練を施し、自らの手で地雷処理を行う事である。現地はカンボジア西北部タイとの国境近く辺境の地であり発展途上にあるカンボジアでもさらに行政の行き届かないきわめて立ち遅れた地域である。産業といえば農業以外にはないのであるが肝心の農地が地雷等で汚染されていて農作業は危険である。今回の処理活動は、地域の地雷処理により土地利用を可能にする他、住民が仕事を確保して現金収入をえるための重要な機会でもある。因みに地雷処理作業デマイナーで月の給料は75ドル、班長、小隊長クラスで100ドル程度である。これは現地の警察官、先生等一般公務員のそれが30ドル程度という事であるからかなり恵まれた額である。地雷処理隊員を募集したときは、現地の人に限定されているが4、5倍の倍率であったと聞いた。地元にとっては貴重な現金収入であるから地域活性に良い影響を与えるであろう。

○女性デマイナーによる処理作業

特色二つ目はこの活動は多くの若い女性がデマイナー(地雷処理作業員)として含まれていることである。世界の中で民間の女性がデマイナーに従事するという話は他に聞いたことはない。おそらく現在ではカンボジアのみではないかと思われる。「どうしてこのような作業に従事するのか？」との問いかけに「地雷があるから地元のために働きます。」と彼女達は何のためらいもなく答えてくれた。危険を顧みず平均年齢21、2才の女性たちが地雷処理をしているのである。ある女性は朝5時半に家を出るという。それから7キロの長い道なき道を1時間半かけて歩いて通ってくる。そしてサイトに着いて持ってきた弁当を半分食べる。昼食のために半分は残しておくらしい。そして準備をして7時半からの作業につく。そして午後3時まで神経を集中した作業が続くのである。

「危険かつハードな業務に女性に従事させる事は問題」という言う声が聞こえてきそうであるが、周到な事前の訓練と実行段階に於ける徹底した安全管理が行われれば事故は起こらない。その結果現在まで無事故である。ところで若い女性を多数採用している理由は現地の貧しい



大豆畑の地雷原での作業

社会的環境から女性が身売りされるようなことを回避するために女性に対しても出来るだけ多くの仕事の機会を与えるためである。

○地雷処理後のコミュニケーションに対する支援活動

特色三つ目は従来の地雷処理活動は地雷処理そのものが目的であるのに対して今般行われている活動は農村部の開発を阻害している地雷を処理するのはもちろんであるが、その後の農村の自立と発展に寄与するものとなっている。活動の内容は当面5ヵ年計画で地雷処理、その後には飲料水用の井戸の掘削、道路の建設、子供の教育のための学校建設、その他公共共同施設の建設等地元コミュニケーション活動自立のためのインフラを整備し将来の町づくりの計画まで含まれている。JMASはこの活動を計画し、実現のために日本政府はもとより、日本、或いは外国のNGO等にも協力を要請して効果的に計画実現に向けて奮闘中である。画期的なこの処理活動は新しいNGO貢献活動のモデルの一つになると思われ各方面からも大きな期待が寄せられている。

○むすび

困難な生活環境の中、地雷処理作業に従事するカンボジア人を直視する時、爛熟した日本社会のなかであって、何不自由ない快適な生活を営む日本人、とりわけ豊かな生活しか知らない日本の若い人達の姿が重なって見えてくる。首都プノンペンの街中で或いは、お寺など人だかりのするところに、義足をつけた人、手足がない人、顔など負傷した人など多くの人たちが物乞いをしている。内戦の戦禍のみならず放置された地雷等で負傷した人たちであろう。昭和20、30年代、我々が子どもの頃日本のあちこちでも見られた光景である。この国も何十年後か判らないが遅かれ早かれ復興が果たされていくであろうと期待している。JMASもカンボジアの奥地でこの国の「地雷及び不発弾ゼロ」を目指して支援している。

現地ではOBでJMASカンボジア代表、兼バットバン地雷処理主任として蘭部宏明氏（防大8期）が、厳しい環境の中、現地指導にあたられている。

OBのご活躍に敬意を表しご健康と「活動」の成功を切に祈念する次第である。



休憩中のデマイナー

“桜華会”について

桜華会準備委員長
吉田 ゆかり
(40期 空 女子学生1期)



平成4年4月4日、防衛大学校40期生の入校式が行われました。昭和28年久里浜の仮校舎から開校して以来、初めて女性が入学した年でもあります。理工学研究科の開設、人文・社会学専攻課程の開設、本科及び理工学研究科に学位授与などの歴史の変遷の中において、男性だけであった防衛大学校に女性が入学しました。現在、防衛大学校の卒業生が2万人を超えている中で、女子学生の卒業生も300名を超えました。

「桜華会」と聞かれて、「？」と思われた方も多いと思います。この度、小原台だよりに投稿させていただける機会をいただきましたので、平成19年2月の正式発会を前にしてではありますが、紹介させていただきたいと思います。

まず、発会するに至った経緯ではありますが、私が防衛大学校小隊指導教官として勤務中（H15.8～H18.3）、女子学生の卒業生が10期生を迎えました。女子学生も、もちろん各期生会には所属しているわけですが、女性同士の親睦・交流を深めることも必要ではないかと思ったからです。女性特有の悩みについても、女性相互間で、情報交換したりできる場が設けられればと思いました。自衛官として頑張っている者、退職している者等、それぞれの現状はありますが、女性として、妊娠、出産、育児、そして、就労等の悩みは誰もが抱えている問題だと思います。このことは、同窓生だけでなく、防衛大学校の在校生についても、不安に思っていることだったのです。防衛大学校の目的を考えた場合、そのような在校生の精神的な支援を図り、少しでも安心して任官できるように、後輩たちを支えていくことができればいいと思っています。もちろん、同窓生が実際に現役として、働いている姿が一番いいのかもしれませんが・・・どのような形であれ、私達、同窓生が今後の後輩たちのために何か役に立てることができればと思うのです。

そのような思いから、まず、女子学生の卒業生を把握することから始まりました。恥ずかしながら「防衛大学校同窓会」についてよく理解していなかったため、自分たちだけでやろうという考えに陥ってしまっていました。しかし、そのような中、防衛大学校同窓会小原台事務局のアドバイスもあり、また、当時の事務局長である新井 宏様（現：副会長）を始め、同窓会本部事務局の皆様の多大な声援を受け、準備を進めることができました。

そして、平成18年3月11日に、「防衛大学校女子学生同窓会」という形で会を催し、併せて、「防衛大学校女子学生の同窓会の発会準備委員会」を発会することができました。女子学生1期の防大40期生を始め、16年度卒業した女子学生10期にあたる防大49期生まで34名が出席してくれました。初めての試みであったこともあり、不安もありましたが、昔話に花咲いたのはもちろんのこと、近況話にも盛り上がり、大変楽しい会になりました。また、今回は、ご多忙にも関わらず、女子学生1期が4年生のとき大隊付指導教官であった小平学校の稲村 3 佐にもご臨席いただき、その中で、「天候に恵まれるのは、成功するための一つの秘訣」とご祝辞をいただき、当日は好天で、この会の発会が成功するであろうと自信をつけさせてもらいました。

なお、本会の名称も検討した結果、様々な案が出されましたが、43期の對馬と新井が提案してくれた「桜花会」に、40期の塚口（旧姓：平松）が改善を加え、「桜華会」となりました。その意味するところは、

- 1 「桜」は古来、花王と称されており、かつ、日本（大和）の国を代表する花であること。
- 2 女性らしさを表すものであること。
- 3 人生を謳歌するという意味の掛け言葉として。
- 4 「桜花」は特攻隊の名称でもあるので、女性として「華やかに」活躍することを意味して。

というようなことから、決定しました。そして、正

式に「桜華会準備委員会」が発足したのです。

同窓会本部事務局との調整の結果、1年間の準備期間を設け、正式の発会することになりました。現在、正式な発会に向けて準備を進めているところではありますが、今年度の防衛大学校同窓会の代議委員会の前の時間帯で、発会式を催させていただくことになりました。一人でも多くの女子学生の同窓生が出席してくれることを願っています。お忙しい時期とは思いますが、この場を借りてお願い申し上げます。

なお、桜華会もこれから、具体的に活動していくこととなりますが、同窓会本部のご指導を受けつつ、各期生会との連携を保持し、会員相互間及び在校生との親睦・交流を深めていきたいと思っています。どうぞ同窓会会員の皆様のご指導、ご鞭撻のほど、宜しくお願いいたします。

(追伸)

女子学生の同窓生の把握もまだ不完全な状況です。この記事を読んだ女子学生の同窓生で、連絡が来ていないという方がいれば、是非、当方（防衛大学校同窓会事務局員 吉田宛）に連絡していただければと思います。

(航空自衛隊 航空保安管制群本部 防衛部 吉田1尉)

陸上自衛隊 小平学校
稲村3佐
(元大隊付指導教官)



防大女子学生1期の入校式：桜の下で（H4.4.4）



初めての防大女子学生同窓会（H18.3.11）

防大50期生に聞く

幹部候補生学校修了所見



陸上自衛隊幹部候補生
陸曹長 加納 慎也

「よろしく。」

・・・あの時、区隊長と交わした握手、そしてその力強さを今でも鮮明に思い出すことが出来る。幹部候補生学校に着隊してから、早半年の歳月が過ぎようとしている。思い返せば、本当に濃密で、有意義な半年間だったと自信を持って言うことが出来る。

幹部候補生学校での生活は、防大とは違う新鮮さがあった。決して型にはまることのない区隊当直勤務。目標・目的、それを達成するための方法を求められる係勤務。次々に訪れる各種行事。約1週間行われる野営訓練等々がそれである。それらを通して、私は防大では得ることの出来なかった様々な資質を得ることが出来た。具体的には、先見洞察力、判断力及び実行力等、初級幹部に必要なとされる資質である。

幹候校で言う区隊当直とは、防大で言う教務・訓練班長に当たる。区隊当直は区隊を「確実に掌握」し、「自らが示した企図」に従わせる。この際、決してワンパターンな指揮が求められることはない。指揮の方法は、各人によって違うからである。幹候校に入校して、名前も知らない同期と一緒に初めて、人員を掌握することがこんなに難しかったかと痛感する者がおそらく出るだろう。防大の時と同じようで全く違う業務内容にカルチャーショックを受ける者もいることだろう。区隊当直は模擬小隊長のようなものだ。区隊当直として、区隊を指揮するチャンスはそれほど多くはない。このようなとき、失敗を恐れることなく果敢に取り組んだ方が、じ後の資となるはずだ。私は、2回区隊当直勤務を経験する機会を与えられたが、1回目は防大の教務班長と同じような姿勢で勤務に取り組んだことから人員の掌握を失敗するという経験をしたため、2回目はそれを反省して、新たな姿勢で勤務に臨み、何事においても確実に自分のなすべきことは何かを考え、そして実行した。これらにより、確実な現況の把握、実行の監督、先見洞察力が如何に大

切か、ということを実感出来、そして、涵養する機会ともなった。

係勤務においては、達成すべき事項、段階的に何を行っていかば最終的な目的が達成出来るのかを重視した指導をされた。この際、各種の行事も含めて、時期の特性を踏まえた上で計画を立てなければならないところが、幹候校での教育の特徴と言うことが出来る。ただ闇雲に計画を立てるのではなく、実効性を伴った計画を立てなければ何の意味もないからだ。また、綿密な計画を作成したとしても、天候などにより実行できない場合もある。いざという時のために、腹案を持っておくことの重要性も係勤務から学ぶことができた。腹案を持っておけば、不測事態の時も迅速に対応することが可能であるし、そして何より、目標を達成するという観点から、目標に向かって幾つもの方法を準備出来ることは、思考の幅を広げる資となるからである。

野営訓練に関しては、大野原・大矢野原・総合訓練と、主に3度の野営訓練を行った。野営訓練においては、小隊の指揮の難しさというものを学ぶとともに、自分の体力・精神力が指揮にどれだけ影響するかということを痛感した。普段の体力練成はこの時のためにある、と実感したのは他でもない野営訓練時であった。また、これらの訓練を通して不撓不屈の精神が涵養されたことは言うまでもない。80キロの道程を完歩したことは、今後勤務する上で困難に直面したとき、心の大きな支えとなるだろう。

これまで、入校間に行われたことから私が学んだことを述べてきたが、幹候校は自主自律の気風を重んずる学校であり、自分の学ぶ姿勢次第では、幹候校の教育は能動でも受動でも良い。私は常に能動であったとは言い切れないが、能動になれば、よりたくさんのことを吸収することが出来るはずだ。私は、当初の段階では失敗を恐れて勤務に消極的になってしまった。このような姿勢で取り組んでいては、得られることは最低限のことしかない。これから入校を控えている皆は、失敗を恐れずに何事に対しても積極的に取り組んだ方が良い。後悔もしないし、得られることも多いからである。

また、今これを読んでいる皆の最大の関心事は、次期からのB課程とU課程一体化教育ではないだろうか。この件に関して少し触れてみたい。

これについては私も注目しているところであり、学生時代にこの話を聞いたとき、教育期間が延びることにつ

いてのみ注目し、マイナスイメージばかりを抱いていたような思い出がある。B課程とU課程の候補生は触れ合う機会は殆どなく、同期生会が企画した懇親会で1回だけ話したことがあった。しかし、そのような場面以外で客観的にU課程の候補生を見てみると、我々が防大1学年時であったときのことを思い出すような気がする。彼らは本校における生活において、我々より積極的なのではないかと感じるのである。彼らが自衛隊という組織に触れたのは本校が初めてのため、より真剣に取り組んで

防衛大学校50期生として



海上自衛隊幹部候補生
海曹長 八木 佑己

はじめに

平成14年4月、早咲きの桜が咲き誇る中、不安と期待を胸に我々50期生は防衛大学校の門をくぐり、それから4年間、花の10代後半から20代前半を小原台で過ごしました。その生活の中で得られたこと、また今後の抱負を述べたいと思います。

1 同期の絆

防衛大学校で得た最高の財産は同期の存在だと思えます。防衛大学校は厳しいとの評判は入学前から聞いており、覚悟はしていたつもりでしたが、1学年の生活はその予想をはるかに超えるものでした。諸先輩方からの熱いご指導、いつ終わるか分からない体力増強は日常茶飯事。時に突然かかる非常呼集、あせって水筒を満水にするところを、ライナーを満水にして頭からかぶった同期、半長靴を左右逆にして履いた同期などさまざまな事態が発生しました。

そんななかでも、逞しくそして楽しく生活が送れたのは、何より同期の存在があったからだと思えます。「喜びは分かち合えば2倍となり、悲しみは分かち合うと半分になる。」とはよく言ったもので、辛いときも楽しいときも、微分方程式の解き方から彼女の作り方まで共有することによって、生活の中にも楽しみを見出すことができました。現在は陸、海、空と道は分かれましたが、まさに「戦友」と書いて「トモ」と呼び合う仲であり、これからもこの絆を大切にしていきたいと考えています。

いると私は思うのである。B課程はU課程の候補生と生活を共にすることで、本校は自衛隊の組織であるということ深く認識すると共に、切磋琢磨し、成長して欲しいと思う。

以上、自分の経験談及びB課程とU課程の一体化教育についての自分の考えを述べたわけだが、88期B課程として幹候校に入校する皆には全てに対して受動に陥ることなく、積極果敢に挑戦し、幹候校生活を有意義なものにしてもらいたい。

2 熱と意気

盛り上がる時はほとんどまで盛り上がるのが防大生の信条であります。その代表的な例が開校記念祭で行われる「棒倒し」競技ではないでしょうか。初めて棒倒しに参加した1学年の時、人生で初めて生命の危険を感じました。上級生も下級生もなく、棒倒しという一つの競技に向けて、20歳前後のいい大人が、己と仲間、そして大隊のプライドと名誉をかけて本気になれる。この「熱と意気」こそが防大生の気質であり、伝統であると思えます。現代の若者が失くしてしまったこの気質を、防大を卒業した者として今後とも常に持ち続けていきたいと思っています。

おわりに

「同期の絆」、「熱と意気」とともに防衛大学校で得られた財産であり、武器でもあります。我々を待ち構えている幹部自衛官という職責は過酷であり、重圧であるに違いない。しかし、「熱と意気」を持ってその重圧を払いのけるとともに、同期総員と協力、個々の力を結集して任務の達成に努めていきたいと考えています。

我々50期生は現在、それぞれ幹部候補生として学校又は部隊で修行中です。我々が現在学んでいることは、基本的な術科、指揮官としての心構えなど幹部自衛官としては非常に初歩的なことであり、基礎にあたる部分です。しかし、この基礎にあたる部分こそが、今後の勤務には最も重要であると思えます。砂の上に楼閣は建ちません。基礎が充実した者のみが、大いなる成果を残すことができます。我々50期生は、防衛大学校で得た「同期の絆」、「熱と意気」を信条に、現在行っている基礎の充実に努め、諸先輩方に恥じぬ立派な幹部自衛官になるべく、修養に励んでいきたいと考えています。



小原台での青春を振り返って



航空自衛隊幹部候補生
空曹長 阿部 竹浩

まず、防大を卒業したばかりの私のような若輩者に投稿の機会を与えて下さった方々に深く感謝の意を表します。誠に僥越ではありますが、折角戴いた好機でありますので、小原台での4年間を振り返ってそこから如何に多くの物事を学んだかということを記したいと思います。

正直に申し上げまして、下級生の時には毎日の生活に追いつくのが精一杯であり、小原台で学ぶことの意義について深く考えるような余裕は全くありませんでした。しかしながら、徐々にではありますが、3学年、4学年と進級するにつれて、防大の意義というものが増えてまいりました。その決定的な契機となったのは4学年時に長期勤務学生に就いたことと他大学での聴講を経験させて戴いたことであります。

この2つの体験を通じて、私は防大生とは如何に恵まれた環境にいるかということに気づかされたのです。私が週に1度通っていた一般大学では、学生は学業をしようにもアルバイトの合間を縫って行わねばなりません。そこまでして苦学しても、1・2学年時は一般教養のみ、3学年になるとすぐに就職活動、卒業後は専攻と全く無関係の就職という具合で、何のために学んでいるのか全く理解できない状況でした。一方で、防大生は国費を以って教育や衣食住が保障され、自習時間は日に2時間も確保されており、専攻や防衛学が職務に直結するのは勿論のこと、一般教養ですら士官の心得となるのです。

また、長期勤務学生の経験を通じては、わずかに20歳そこそこの若造に国と学校が権限を与えて組織を動かす教育をしているということに気がきました。指導教官から手厳しく指導されますが、所詮は学生、全く責任をとれないのにそのような大きな権限が与えられ、失敗してもいいことを前提に、国の負担で、教育が行われるのです。普通、どのような企業でもこのような人材育成は行わないはずです。

4学年時に、防大生は信じられないほど恵まれているという事実気づいた私ですが、学生から任官して自衛官になるまで、そのような環境が整備されている理由に思いは至りませんでした。しかし、それはサービスの宣誓のとき、「軍隊が崇高な任務を持っているからなのだ」ということに気づかされました。どのように崇高かといえば、

それは金銭や採算といった私欲的なことから超然としているという点において崇高であると言えます。たかだか墓場までも持っていけない金品等のために、「事に臨んでは危険を顧みず」とは誓いを立てられません。オリンピックやワールドカップで活躍するスター選手のような扱いを自衛隊は決して受けませんが、それらの感動は全て国家の独立が保たれていることが大前提となって成立しているに過ぎません。

ここまで、防大生活とは如何に恵まれていたかという話をしてきましたが、恵まれた環境があったからといって、防大で培ってきたものを自衛隊において一人の力だけで活かすにはあまりにも限られています。これまでの私の生活においてはいつも苦楽を共にする味方がいて、私を支えてくれました。東大生にせよ、京大生にせよ、俗にエリートと言われる人々は個人が単位です。だから、安易に利己的な成果主義に走るのかもしれない。しかし、小原台での苦楽を共にする防大生は同部屋の学生のいびきの音まで知っています。正に「同じ釜の飯を食う仲間」であり、単位は部隊なのです。

ここで私が言う「味方」というのは単に「同期」のことだけではなくありません。先輩、後輩を含めて私は「味方」と思っています。先輩に指導され、同期に助けられ、後輩を指導することでこちらも同時に教えられて、今ここに自衛官としての自分が存在します。如何に兵器の技術や運用思想が加速度的に進歩しようとも、組織の根幹をなすのは人と人との関係に尽きるということを私は小原台の生活を通して深く学ぶことができました。

防大生は恵まれている、しかもその環境をさらに活かすように促してくれる「味方」に囲まれているという話でしたが、私が防大生活で一番印象に残った言葉があります。実は孔子の『論語』を紐解いていた1学年時の室長に教えてもらった言葉ですが、「人知らずして慍らず、亦君子ならずや」という言葉です。確かに、自衛隊は必ずしも外国の軍隊が持つ当然の特権やステータスを持っているとは言い難い。しかしながら、富や名声を追いかけているわけではないというわけです。当時の室長は私を厳しく指導してくれる「味方」だったというわけです。

このように、私は小原台で様々なことを学ばせて頂きました。国にも自衛隊にも防大にも、そして私に関わってくれた全ての人々に恩があります。防大創立50周年に入校したということで何かと注目を集める期別に属しているからこそ、一層期待に強く応えなければなりません。まだ、幹部任官すらしていない至らない身ではありますが、これからの部隊勤務を通じて、一つ一つ恩返しをしていきたいと決意を新たにしております。これからも宜しくお願い致します。

「就職援護最前線で活躍する同窓生」

(財)自衛隊援護協会事務局長

武田 能行 (13期陸)



1 はじめに

この度、隣接する防大同窓会本部事務局の小津さんから、私宛に表題の投稿記事の依頼をいただきました。日頃から「お隣さん」として大変お世話になっていることでもあり、ささやかですが在職2年半の経験から学んだところを述べさせていただきます。

2 自衛官の就職援護の現状と将来

(1) 自衛隊の援護システムの特性

自衛隊の援護システムは、中央諸官庁の中でも極めてユニークなものです。それは防衛庁自身が自己完結型の援護システムを保有しているという点です。これを構成しているのが厚生労働大臣から無料職業紹介権（求職者を求人企業等に紹介できる法的権限。「職安法33条で規定：不法斡旋は1年以下100万円以下の罰則」）を付与され、退職自衛官専門に職業紹介を行っている援護協会いわば「防衛庁専属ハローワーク」と援護協会に協力して全国300ヶ所の駐屯地・基地に展開し退職自衛官の再就職の支援をしてくれている約1,200名の「援護実働部隊」の存在です。

(2) 他省庁の援護はどうしているのか

では防衛庁以外の他省庁はどうやって退職者の面倒を見ているのでしょうか？彼らはそのほとんどが戦前から長い年月の間に積み上げた既得権益（法権限）を持っています。こうした権限に基づき、国に代わって行政事務を代行する公益法人（民法第34条を根拠とし、財団と社団があり所轄官庁の発意で設立が可能）や特殊法人（立法処置による公益法人）を設立して、そこを退職者の再就職の受け皿としてきました。分かり易いイメージとしては、例えば「財団法人交通安全協会」は警察庁が設立し、警察に代わって全国都道府県で自動車免許の更新手続きを行っていますが、ここは退職警察官の再就職の受け皿となっています。こうし

た公益法人は、防衛庁は僅か21ですが厚生労働省は2,000、国交省や警察庁、文科省なども1,500以上、中央官庁所管のみでも7,000を超えています。地方自治体を合わせると実に26,000の公益法人が公務員退職後の援護の受け皿として存在しています。（もちろん各設立目的はあります）逆説的に云えば防衛庁は戦後後発官庁で利権も少なく、しかも25万人の大所帯でかつ特殊な採用制度といった事情から現在のような特殊な援護システムを開発してこざるを得なかったということでしょう。

(3) 自衛隊援護システムの今後

しかしながら、小泉さんの所謂「構造改革路線」は、この公務員の俗称「天下り先」に対しても大鉈を振るってきました。即ち、平成13年の公益法人・特殊法人改革法案の成立を契機として、各種法人の統廃合、定員の削減、国庫予算の削減、補助金の使用規制等、強烈に公益法人の経営を圧迫しています。（当協会も例外ではありません）また、この流れは18年6月の民法改正に伴い、現存26,000の公益法人一つひとつの必要性を白紙に戻して再審査するという「公益法人抜本改革法案」が成立したことにより、この数年先には、再就職の受け皿的性格の公益法人は、ほとんどが淘汰・精選されることになるでしょう。

こうした時代の流れは、旧来の「権益依存型再就職システム」に代わって、防衛庁特有の「自己完結型援護システム」の存在価値が向上することを意味し、現実には昨今は他省庁からの垂涎的な言辞をよく聞くようになりました。

3 自衛隊と民間の接点にいて感じる事

ともかくも防衛庁・自衛隊は独自の再就職支援システムのお陰で毎年自衛隊を退職してゆく9,000名以上の皆さん（概ね定年・任期各半数）にほぼ100%職を提供しています。現役当時は当然のことと思っていましたが、これは大変なことで、一般社会では50歳台半ばで職を得ることのできる人は好景気とい

われる今年に入っても50%台です。2年前までは20%を切っていました。余談ですが先日中国湖北省の退役軍人再就職支援機関が自衛隊援護協会の研修に来た折りの懇談では、中国では定年者（大部分が40歳代）に対する退職サービスは転職支援金（我が国の退職金）が約200万円のみ、再就職先が見つかる人は1割だと云っていました。私が、「日本では退職金が平均で3,000万円、100%再就職、かつ満60歳になるまで年平均250万円の生活保障がある」と云ったら目を丸くして顔を見合わせ、どよめきが起きました。国内を見ても、退職前に1ヶ月間の再就職準備教育を実施し、3ヶ月間の有給準備期間を与え、かつ100%再就職先を斡旋してくれるような企業や官庁はどこにもありません。自衛隊は温室です。経費は全て国の予算で賄われ、金銭的な苦勞を全くせずに半生を送ってきました。給料は毎月18日には間違いなく口座に振り込まれ、住居も国からあてがわれ、医療は自己完結、年金も自動的に手続きを整えてくれます。普段、空気や水の有り難さを感じないように、退職し組織のシェルターから出てみて初めて現役当時がいかに恵まれていたかが分かります。

4 退職期を控えた現役の皆さんへ

このように云われると現役の皆さんは「分かっているよ」と反発されるかもしれません。しかし、程度の差こそあれ全員例外なく外の世界、第二の職場に対するカルチャーショックに悩むのは事実です。在隊当時と比較し、第二の職場を批判的に受け止めま

す。そして職場文化の相違から来る「違和感」「屈辱感」「孤立感」への適応に苦しみ、現実には約20%の人が途中で退職しています。退職3年後、先輩1,300名に対するアンケートの結果を見ても「再就職前の予想と大きく異なったことは？」の問いに「仕事の内容と職場の雰囲気」との答えが6割に達しています。これは階級が上がるにつれて上昇し、佐官クラスでは実に約7割もの方がそう答えています。一方「再就職において最も大切なものは？」の問いには実に6割の人が「前向きな姿勢を持ち続けること」とも答えています。私も、最初の1年間、あまりの環境の違いに孤立感と無力感にさいなまれ、生まれて初めて「辞めたい」、という気持ちと戦いました。「俺の人生を賭けた自衛隊生活は終わった。」という脱力感と先輩から聞く「出勤自由の顧問職」の気楽なイメージ。こんな気持ちが交錯した中途半端な船出だったと今振り返って反省しています。どうか、同窓生の皆さん「覚悟」を決めて下さい。皆さんのこれから経験する職場は「地獄の戦場」です。隠れ家もシェルターも無く、無防備で周りは敵ばかりの孤立無援の世界、頼りは自分自身しかありません。どうか自分の力でこの包囲網を突破して下さい。そして「石の上にも3年」は我慢してみてください。暗闇に目が慣れるように周りが見えてくることでしょう。

最後に援護協会発行の「定年自衛官の再就職必携（送料込700円）」を是非読んでみて下さい。先輩等の体験談を数多く収録しています。（Tel 03-3355-0505）



自衛隊援護協会主催
退職者合同企業説明会

小原台は2007

西原 正（にしはら まさし）氏防衛大学校校長離任

西原氏は平成12年4月1日から6年間にわたり防衛大学校の校長を勤められたが、平成18年3月31日付で同職を辞された。離任式の後、学生・学校職員全員の見送りの中、惜しまれつつ小原台を後にされた。現在は財団法人「平和・安全保障研究所」の理事長として活躍されている。



離任式



離任式 観閲行進



お見送り



お見送り

五百旗頭 真（いおきべ まこと）氏防衛大学校校長就任

五百旗頭氏は25年にわたる神戸大学の教授を終えられ、平成18年8月1日付で第8代の防衛大学校校長に就任された。第3代校長の猪木正道氏は五百旗頭校長の京都大学法学部時代のゼミの指導教官であり、第6代松本三郎氏は国際政治学会の大先輩、また第7代の西原 正氏は京都大学と猪木ゼミの先輩でもあるそうだ。今後の熱いご指導をお願いしたい。



着任式



着任式 巡閲

馬場 順昭（ばば よりあき）氏は平成18年4月1日付で防衛大学校副校長兼教授（システム工学群 航空宇宙工学科）に就任。



（主要経歴）

昭和45年 防衛大学校 助手
平成6年 同 教授
平成12年 同 航空宇宙工学科長
平成16年 同 理工学研究科教務主事
平成17年 同 教務部長
平成18年 同 副校長（教育担当）

戸田 量弘（とだ かずひろ）氏は平成18年8月21日付で防衛大学校副校長に就任。



（主要経歴）

昭和49年 防衛庁
平成11年 同 長官官房審議官
平成12年 福岡防衛施設局長
平成14年 技術研究本部副本部長
平成15年 防衛施設庁施設部長
平成18年 同 次長
平成18年 防衛大学校副校長（企画・管理担当）

第50回全日本カッター競技大会 優勝

防衛大学校短艇委員会

52期主将 高橋 一平

平成18年5月20日(土)第50回全日本カッター競技大会が兵庫県神戸市神戸大学深江キャンパスで行われました。レースは2,000m（1,000mブイ回頭）で実施され、本校を含む、12校が優勝を争いました。

防大は予選第1レースで他校を寄せつけず大差で予選1位通過を果たし、決勝へ進出。決勝レースは、防大、長崎大、東京海洋大学海洋科学部（旧東京水産大）と敗者復活戦から上がってきた昨年の優勝校海上保安大の4校で行われました。500mまでは4校が並ぶ大接戦、その後、疲れの見える海上保安大学校が徐々に遅れだし、3校の戦いに。勝負を決めたのは、回頭直前の30枚ダッシュ。防大は圧倒的な行き足で他大学を圧倒し、トップに躍り出ました。後半、1,500m付近で東京海洋大学海洋

科学部、長崎大学に追い上げられるものの、時既に遅く、防大短艇委員会は、2艇身という差をつけ、2年ぶり15回目の全日本優勝を果たしました。大会の写真をホームページに掲載しておりますのでご覧ください。

(<http://www.nda.ac.jp/ed/tantei/>)

最後に、今回優勝できたのも、学校関係者を始め、黒部会や海上自衛隊阪神基地隊の方々、防大OBの皆様のご指導・ご支援のおかげであります。本当に有難うございました。現在、我々52期短艇委員会は、部員一同一致団結し、引き続きとう漕技術の練磨に励んでおります。再び、来年5月神戸にて、2連覇の確立とすることを誓い、紹介の挨拶といたします。



念願の優勝を果たした51期

ヨット部 世界学生ヨット選手権大会に参加して

ヨット部クルーザー主将 安達 拓郎

防大ヨット部クルーザーは、平成18年3月に行われた全日本学生外洋帆走連盟によるANIORU CUPでクルーザーヨット日本一となり、今回の Student Yachting World Cup 2006（世界学生ヨット選手権大会）への出場権を獲得し、日本の代表として出場してきました。この Student Yachting World Cup 通称SYWoCはフランス共和国のエコールポリテクニックという軍の工学系大学が主催し、学生が中心となって運営される国際ヨットレースです。大会会場はパリからTGV（高速列車）で3時間のところにあるブルゴーニュ地方のロリアンという都市にあり、参加者は世界各地で予選を勝ち抜いた11ヶ国の選手と前回の優勝校、これに主催校のエコールポリテクニックの2チームを合わせた全13チームです。今回の大会期間は10月27日から11月4日までの9日間でそのうちレースが6日間、合計12レース（ナイトレースを1レース含む）行われました。

レースの結果は13チーム中10位という成績でした。この成績は過去2回参加している防大ヨット部では一番良い順位ですが、目標としていたシングルにはあと一步とどきませんでした。しかし、結果がどうであれその結果

に行き着くまでの過程の中で自分たちが一生懸命にやってきたことや、これまでのどんなレースよりもフランスで行った12レースを最高に楽しめたことで後悔はありません。

また、今回の大会期間中、お国自慢料理コンテストや様々なパーティーが行われました。お国自慢料理コンテストでは天ぷらと日本酒を振る舞った日本のブースが一番盛り上がり、それから日本が一番の人気者になったりもしました。このようにヨットというひとつのスポーツを通じて同年代の他国の学生とレースで共に悔しがり、パーティーで共に笑い合えたことは人生の宝物となったと思います。本当に貴重で何にも代えがたい経験をすることができました。私自身は今大会で現役を引退いたしますが来年、再来年と後輩たちにも同じ体験をしてほしいと思っております。

今回の大会出場にあたっては様々な方からのご支援を受けました。私たち学生だけでは決して出場することはできなかったと思います。OB会、同窓会、学校関係者の方々を初め監督、顧問、助監督、の方には大変感謝しております。本当にありがとうございました。



8人クルー（内、女子2名）



各国チーム交歓会

韓国海軍士官候補生とのスポーツ交流

平成18年9月8日、韓国海軍士官候補生約160名が大型バス4両で来校、韓国側から、サッカー選手15名、バレーボール選手10名が、防衛大学のそれぞれの校友会

チームと対戦した。結果は、サッカーは「1：0」で前半の1点を守って勝ち、バレーボールは、3セットを連取した。試合後、プレゼント交換をして友好を深めた。



サッカー（日・韓両チーム）



バレー（日・韓両チーム）

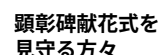
平成18年度運動系校友会活動結果及び部員状況

18. 11. 27現在

校友会名	成 績	部員数		校友会名	成 績	部員数	
		男子	女子			男子	女子
応援リーダー部	開校記念祭演舞披露、各部等応援実施	16		グライダー部	週末フライト訓練8回実施	23	
短艇委員会	全日本カッター競技大会 優勝 関東地区カッター競技大会 2位	68		ソフトテニス部	秋季関東学生リーグ 7部優勝 6部昇格	20	
バスケットボール部	男子 秋季関東リーグ戦 4部21位 女子 春季神奈川リーグ戦 2部5位	34	9	ボクシング部	関東大学トーナメント戦 4部2位	56	1
柔道部	関東学生体重別選手権出場	53	6	レスリング部	東日本学生リーグ戦 2部優勝 全日本学生選手権大会、全日本ジュニア選手権大会出場	24	1
ラグビー部	関東学生クラブ選手権 3部3位 関東学生リーグ戦 3部3位	143		ボート部	全日本選手権大会、全日本大学選手権大会出場	21	1
サッカー部	神奈川県大学秋季リーグ戦 1部8位	56		フィールドホッケー部	秋季関東学生リーグ戦 男子2部8位 女子3部2位	35	9
剣道部	関東理工系学生選手権大会 男子団体準優勝 男子個人3位 関東理工系学生新人選手権大会 男子団体準優勝	60	10	ワンダーフォーゲル部	蝶ヶ岳、西湖レークサイド、大菩薩峠、尾瀬ヶ原、北岳登山実施	20	
空手道部	全日本大学選手権大会出場 全国国公立大学選手権大会出場 秋季関東リーグ戦 男子2部2位 全自衛隊大会 女子組手個人準優勝	50	7	パラシュート部	日本選手権大会 Jrの部優勝	18	
バレーボール部	秋季関東リーグ戦 男子4部4位 女子9部4位	23	13	準硬式野球部	秋季神奈川大学リーグ戦 1部5位	32	
卓球部	秋季関東学生リーグ戦 5部4位	13	4	合気道部	全国合気道演武大会、防衛庁合気道連合会演武大会出場	68	2
陸上競技部	関東理工系学生大会出場	62	3	体操部	東日本学生選手権大会出場	25	5
硬式庭球部	関東理工科リーグ戦 男子6部2位 女子9部2位	46	6	弓道部	秋季南関東リーグ戦 男子1部5位 女子2部2位	32	5
硬式野球部	神奈川秋季リーグ戦 2部2位	43		少林寺拳法部	関東学生大会 団体演武最優秀賞 全日本学生大会 団体演武最優秀賞	66	1
射撃部	全日本学生ライフル射撃選手権大会 個人50Mライフル伏射競技2位	21		フェンシング部	全国国公立フェンシング選手権大会 フルレ団体5位	20	
山岳部	小川山、東呉野岩壁、地藏岳、劔岳、三つ峠、甲斐駒ヶ岳登山実施 文部科学省大学登山リーダー研修会参加	8		ウェイトリフティング部	全日本大学対抗ウェイトリフティング選手権大会出場	15	
水泳（競泳）部	全国国公立大学選手権大会、日本学生選手権大会出場	32	3	相撲部	全国国公立大学対抗相撲大会 団体4位 全国学生相撲選手権大会 Cリーグ優勝 東日本学生相撲リーグ戦 3部3位	18	1
水泳（水球）部	関東学生リーグ戦 3部優勝 2部昇格	22		バドミントン部	秋季関東大学リーグ戦 男子5部2位 女子4部6位	27	4
ハンドボール部	秋季関東リーグ戦 3部6位	36	1	居合道部	無双直伝英進流居合道関東大会出場 全自衛隊大会出場	27	2
アメリカンフットボール部	関東学生リーグ戦 2部Aブロック5位	87		吹奏楽部	福井公演、久里浜駐屯地創立56周年記念式典 開校記念祭記念式典・観閲式・定期演奏会実施	38	6
ヨット（小型）部	関東学生秋季選手権大会出場	19	1	儀仗隊	開校記念祭記念式典・自衛隊音楽まつり参加	45	3
ヨット（クルーザー）部	世界学生ヨット選手権（フランス）10位	13	4				
銃剣道部	全日本青年大会 男子団体準優勝、3位 全日本学生選手権大会出場 男子団体戦優勝、3位	29	7				

[illegible]

事務局機関誌・HP担当 池田 記



平成19年度海上交通留学生の来日 11月19日(日) 著: 日本郵船 一冊

瞬く間に時間が過ぎた会食だったが、会長から卒業留
学生に記念品として『同窓会の文鎮』が贈られたのち、

● 同窓会事業 ●

全員が肩を組み合って「追遥歌」を意気高らかに合唱した。歌い終わったものの、盛り上がった勢いは止まらず、事業担当としては想定外だった「学生歌」まで合唱した。

二人の留学生にとっては、日本における最後の行事となったこともあり、「今夜のことは決して忘れることはありません」という言葉を残して会場をあとにした。

事務局事業担当 小池 記



集合写真

同窓会ゴルフ大会 — シニア・レギュラーに分れて熱戦 ● ● ● ● ● ● ●

今年で10回目を迎えた恒例の同窓会期別対抗ゴルフ大会は、9月21日、9月28日の2日間にわたり、千葉カントリー川間コースにおいて実施されました。両日とも秋晴れの爽やかな天気のもと、松本三郎防大前校長にも特別参加をいただき、選手は各期の榮譽を担い、防大同窓生らしい深淵とした熱戦が繰り広げられました。

平成9年、1期生から7期生、各期10名の選手で始まった大会も今年は新たに16期生が加わり、総勢160名の参加規模となりました。参加者の増加に加え、年齢層も広がってきました。このため、今年から9月21日にシニア（1期生から6期生）、9月28日にレギュラー（7期生から16期生）に分れて実施されました。団体戦は、シニア

では上位5名のネットで、また、レギュラーでは上位7名のグロス及びネットで競われました。個人戦は、シニア、レギュラーごとに、グロス及びネットにより競われました。

団体戦の結果は、シニアではネットの部で3期生が9年ぶり通算2度目、レギュラーではグロスの部で13期生が3連覇、ネットの部で8期生が3年ぶり通算4度目の優勝を飾りました。また、個人戦の結果は、シニアではグロスの部で2期生の大中庚夫、ネットの部で3期生の朝日通夫、レギュラーではグロスの部、ネットの部とも10期生の光吉達幸の各氏が優勝を飾りました。

事務局事業担当 赤瀬 記

期別對抗戰競技成績

●シニアグループ

順位	ネット
優勝	3期
準優勝	4期
3位	6期
4位	5期
5位	2期
6位	1期

●レギュラーグループ

順位	グロス	ネット
優勝	13期	8期
準優勝	10期	10期
3位	9期	7期
4位	8期	9期
5位	7期	13期
6位	12期	11期
7位	14期	12期
8位	16期	15期
9位	11期	14期
10位	15期	16期



実行委員長による競技説明



レギュラーグロス 優勝
13期生チーム

開幕大会

第8回同窓会開基大会は、平成18年9月2日(土)、日本棋院本院(市ヶ谷)において開催されました。今回は1期から今回初参加の16期まで120名(昨年は約100名)が参加。随所に白熱した戦いが繰り広げられました。

囲碁大会は前回まで、各期 8 名の個人成績を集計して期の成績を決めていましたが、年々選手数の確保が難しくなってきたことや強い期が固定化するなどの問題が提起され、今回から「期の勝敗を競う面白さを維持」しつつ「少人数期でも楽しめる」よう A、B 2 リーグ制を採用することになりました。

具体的には、Aリーグは昨年（第7回）の成績上位6個期（各期8名）によるチーム対抗方式、Bリーグはその他の10個期（各期4～8名）による個人成績集計方式により、各リーグごとに優勝を争うとともに、今回のAリーグ下位2個期とBリーグ上位2個期が次回はリーグを入れ替わると



熱戦風景



熱戰風景

区分	優勝	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位
A	6期	4期	7期	3期	2期	9期				
B	5期	14期	11期	16期	1期	8期	13期	10期	12期	15期

事務局事業担当 松永 記

	優 勝	2 位
グランドシニアの部	中口、中川組(3期)	稲見夫妻(3期)
シニアの部	7期チーム	10期チーム
レギュラーの部	14期チーム	16期チーム

● 同窓会事業 ●

たい雨でしたが、188組307名が小原台に集合しました。

防衛学館での受付・休憩の後、記念講堂での卒業式に参加しました。講堂の座席数制限のため、入場しての参列は150名、他は隣接するAV講堂で、大型スクリーンにより式典を鑑賞する形となりました。

式典では、西原学校長（当時）の式辞で「卒業43年目に当たる7期生が、ホームカミングディで参列され、卒業生諸君を激励し・・・」と、紹介がありました。

雨があがり、陸上競技場で行われた観閲式では、第1コーナー付近に椅子席が準備され、卒業生の幹部候補生の姿、学生行進等を堪能しました。

その後、東京湾を臨む学生会館4階で同期生懇親会が行われ、途中、西原学校長の挨拶場面もあり、大いに盛り上がりました。



HCD 第7期生

3 第8期生HCD

第8期生のHCDは、平成19年3月18日（日）、本科51期生等の卒業式に合わせて行われます。卒業式・観閲式参列のほか、資料室で8期生関連の資料展示、横須賀市内での懇親会が計画されています。

事務局 事業部長補佐 鈴木 記

第1回ホーム・ビジット・デー（HVD）・・・・・・・・

あり方検討以来その実施が期待されていた「ホーム・ビジット・デー（HVD）」は、30期生会（会長：堀切光彦1陸佐）の団結力と熱意、ならびに防大側の温かい支援によって、その記念すべき第1回目が開催された。

HVDは、平成15年防大「同窓会あり方検討」の中で現役同窓会会員との交流も実施すべきとの答申を踏まえたもので、「現役会員の同窓会意識の高揚」「同期生の団結強化」及び「防大在校生との交流」を図ることを目的としている。

11月12日（日）、18年防大開校祭当日、卒業20周年を祝う30期生88名とご家族を合わせた169名が小原台に集い、陸海空の枠を超えて熱く青春の夢を語り合い、開校祭行事に参加し、HVDの意義を確認し合った。

行事開催に先だって、HVD実施に深いご理解とご高配をいただいた五百旗頭学校長、中村防大幹事及び佐伯同窓会会長を陸海空の代表3名が表敬訪問し、大変温かい励ましの言葉を戴いた。

学校長からは、アジア諸国における士官育成制度の特性・相違点などについても、予定時刻を過ぎるまでお話を戴いた。

本HVD行事は、防衛学館を拠点として、顕彰碑前で殉職者に献花、黙祷を捧げた後、総合体育館西に場を移し、悠仁さまの御印「高野槇」の記念植樹を行った。その後陸上競技場へ移動、観閲式を見学の後、本館前で記念撮影を実施。その後防衛学館の教場に準備された特設会場において、30期生会総会と懇親会が開催された。

懇親会の中程には、佐伯同窓会長が激励訪問されて「30期生会20周年への祝意」を表された後、「若さあふれる現役同窓生が母校を訪問することの意義」、「それが実現されたことへの安堵感並びに30期生会の団結力への賞賛」を述べられ、参加者の大きな拍手に送られて懇親会場を後にされた。その後懇親会は30期生の尽きぬ夢と慕情と友情の交歓の中、第1回HVDの幕を閉じた。

本会の推進役の一人、陸幹校の福田和彦1陸佐は、「大変な盛り上がりの中、参加者の喜びに満ちた笑顔と笑い声が会の成功を物語っていたものと思います。実施して本当によかったと感じております。」と結んだ。

来年の31期生HVDもまた成功だった、と言えるための準備も、着実に進めていきたい。

事業部事業担当 中村 記



顕彰碑献花



高野槇の記念植樹



総会風景



30期及びその家族

MCIの平成18年度の現状について・・・・・・・・・・

MCI 事業部長 井本尚英（9期陸）

MCI（Military Cyber Institute＝仮称）は防衛大学校創立50周年記念行事の一つとして提案された事業です。防衛大学校の卒業生の軍事に関する識見を集結し、国家・社会に対して軍事的考慮の重要性を広く発信することを目的としています。

その主たる手段として、コンピューター・ネットワーク技術を積極的に活用して情報を収集、分析、発信することが提案されています。

平成15年から準備委員会が発足し、本格活動したときの実施要領・組織について検討を重ねてきましたが、平成18年度に防衛大学校同窓会の事業部のひとつとして活動を開始しました。

MCIに提案されている事業と現状

1. 情報システムの構築と運用

平成15年度にホームページを立ち上げ、同窓会ホームページとして運用中です。

2. 軍事情報の発信

- a. 同窓生がもっている軍事に関する識見の一部は同窓生の著作物にあるとの理解から、平成18年度から軍事情報の発信として同窓生の著作の紹介を同窓会ホームページで開始しました。引き続き論文、講演録の掲載を行う予定です。
- b. 独自にホームページを立ち上げ軍事情報を発信している同窓生には、そのホームページにリンクを張る了解をとり、同窓会ホームページで紹介する予定です。
- c. また、MCIの企画で軍事情報を収集し、著作物として発行し、また、ホームページを通じて発信することも検討しております。

3. 防衛能力者の登録・継続検討中

防衛講話、戦史研究、語学、特殊軍事技能所有者を同窓会に登録し、要請があれば同窓会として積極的に紹介し、講演会の講師等を紹介する構想です。そのためには、同窓生が現役自衛官として勤務していたときの専門分野を同窓会で掌握し、その情報を整備しておく必要があります。特定の軍事情報に関して外部から、同窓会に照会があった場合に適切な情報を提供することが可能となります。例えば、潜水艦に関する情報は、その性能諸元に関してはジェーン年鑑等を参照すれば足りませんが、操艦などの具体的な経験による情報は、その経験を有する同窓生こそが適切に対応できると思われます。防衛講話、戦史研究などは、上記2の軍事情報の発信者の中から選ぶことが可能です。

4. 貢献志願者の登録・継続検討中

災害時のボランティア活動、隊員募集支援、基地行事等支援、趣味・生甲斐分野の指導等が可能な同窓生を予め、それぞれの分野別に登録しておき、要請があったとき同窓会として紹介する構想です。上記3の防衛能力者の登録と同様に、各同窓生が貢献可能な分野を把握しておき、要請により対応できる体制を整えておこうというものです。

5. その他（受託事業）

上記以外にMCIには提案された事業として、

- a. 統合運用に関する資料翻訳・分析・解説
- b. 自治体に対する災害時CPX支援
- c. 防衛研究所の資料整理の受託

などがあります。これらは収益事業として位置づけられたものですが、同窓会の法人化とも関連した継続検討すべき事項であると、現時点で判断しています。

MCIは防衛大学校創立50周年記念行事の一つとして提案されましたが、次の50周年を目指し、長期間にわたってその内容の充実を継続させていく事業です。3年間の準備期間を経て、ようやくその一歩を踏み出すこととなりました。今後とも同窓生の皆様の変わらぬご理解とご協力をお願いいたします。



期生会だより

第4期生会だより

4期生会理事 加藤 哲朗（陸）

1 平成18年度役員について

(1) 平成18年度第4期生会本部役員

役員	氏名	住所	電話（FAX）
会長	田中 厚彦	〒359-0037 所沢市くすのき台3-12-6-104	04-2994-0856（同）
理事（陸）	加藤 哲朗	〒277-0827 柏市松葉町6-6-5	04-7131-8455（同）
理事（海）	辻口 利文	〒167-0032 杉並区天沼3-20-6	03-5932-8749（同）
理事（空）	嶋崎 忠雄	〒275-0021 習志野市楠ヶ浦1-29-2-128	047-541-3037
総務（陸）	山中 欣也	〒221-0863 横浜市神奈川区羽沢町348-109	045-371-0297（同）
総務（海）	大野 淳一	〒284-0024 四街道市旭ヶ丘4-9-4	043-432-7818（同）
総務（空）	斎藤 芳信	〒187-0011 小平市鈴木町1-494-1-2-301	042-322-6273
会計（陸）	杉原 佳	〒273-0041 船橋市旭町1-13-57	047-430-5352（同）
会計（陸）	関根 晟	〒339-0006 岩槻市上里2-5-5	048-794-0942（同）
会計（空）	藤本 隆	〒171-0033 豊島区高田2-8-9-710	03-3987-0849（同）
会計監査（陸）	堀川 正照	〒143-0016 大田区大森北2丁目13-31-1918	03-6824-5029
会計監査（海）	野口 章	〒277-0921 柏市昭和町大津が丘3-35-2	04-7139-3720（同）
HP担当（空）	筒井 敏樹	〒247-0063 鎌倉市梶原3-21-5	0467-46-5930（同）

(2) 防衛大学校同窓会の規約改正に伴ない第4期生会を代表する役員は次の通りとなります。

役員	氏名	備考
代表	田中 厚彦	会長兼務なお代表は同窓会の会務の遂行について代議員等を統括する
代議員（陸）	大久保 浩	〔住所〕〒236-0005 横浜市金沢区並木3-11-8-502 (Tel・Fax 045-785-2841)
同上（海）	辻口 利文	兼務
同上（空）	斎藤 芳信	兼務
HP担当（空）	筒井 敏樹	〔住所〕〒247-0063 鎌倉市梶原3-21-5 (Tel・Fax 0467-46-5930)
業務幹事	加藤 哲朗	当該年度の同期生会の代表理事が兼務する

2 平成18年度第4期生会総会・懇親会について

平成18年度第4期生会総会・懇親会を下記により実施致します。万障繰り合わせの上、多数の会員が出席し、旧交を温めて貰うことを切に希望します。

記

- (1) 日時：平成19年2月9日（金）13：30～15：30
（受付開始概ね13：00）
13：30～14：00 総会爾後懇親会
- (2) 場所：グランドヒル市谷 3F「白樺の間」
- (3) 会費：紳士 7,000円 淑女 3,000円
- (4) その他：会員全員に対する出欠調査は実施しませんので、出席を希望する会員は、上記本部役員又は地域幹事へEメール、電話、FAX等でお知らせ下さい。

六航会の近況

六航会会長 齋藤 龍男（空）

そもそも、六航会とは、防大6期の航空要員として在籍した者（正会員）及びその配偶者（準会員）で結成している、親睦会のことを言います。卒業以来鬼籍に入る者も出るようになり、現在正会員106名と成りました。六航会は年1回、都内、地方と交互に開催してきましたが、両親の介護問題や健康上等の事もあり、今回をもって地方遠征はしばらく休止する事にしました。今回が最後になりますので、北海道函館へ二泊三日と酒落込みました。六航会の活動状況の一つとして、その行状を綴ります。「安くして豪華に」と言うキャッチフレーズのもとスタッフ一同（特に山田君夫妻）努力の結果、京都、浜松からの遠方の参加者もあり総勢34名の団体と成りました。

第1日目（10月22日）、羽田発15：10。東京の空は晴れていましたが函館は小雨。明日の天気を気にしながら宿泊地、湯の川のホテルに17：00到着。総会、懇親会の開催は20：00。この間の3時間をどう過ごすかが問題（実は格安の条件の一つがこれ）でしたが、さすがは六航会会員文句も言わずに、時を消化してくれました。入浴疲れ、待ちくたびれ、空腹、が極度になったところで総会、懇親会の開催。この一年間に亡くなった準会員の、故人谷夫人、故齋藤（勇）夫人、故西川夫人への黙祷後、総会事項ははしょるにはしょって、すぐ懇親会へ突入。条件が重なった為、飲む、食べるスピード倍増。従って酔うのも早く、あっという間に一次会終了。流れを汲んで、幹事の部屋にて二次会を開催（酒は持ち込み）。酔いは絶好調、みんなべろんべろんに酔っぱらい自分の部屋にどうやってたどり着いたのか分らない者も居たのでは。筆者も断片的に記憶しているのみ。何時まで起きていたのか定かではありません。こうして一日目は終わりました。

第2日目（10月23日）、気にしていた雨は上がり、風は



函館空港にて

少々あるものの快晴。この日は自由時間。観光バスで観光する者、予め勉強していたコースを散策する者、レンタカーで廻る者、観光タクシーで廻る者、夫々のグループに別れて観光を楽しみました。夕方、三々五々に集まり、夕食のグルメに繰り出して新鮮な海鮮料理に舌鼓を打ちました。夜は世界三大夜景の一つ函館山からの夜景を楽しみました。風が相当強かったのですが、これが効を奏して外気の塵芥を吹き飛ばし、実にみごとな夜景を演出してくれて、絶景の一語に尽きる素晴らしい眺めを堪能しました。昨夜の疲れも重なり、函館市内のホテルで、早めの就寝と成りました。ちなみに筆者が昼に廻ったコースは土方歳三終焉の地 — 五稜郭 — 大沼公園 — 啄木小公園 — 啄木一族の墓 — 立待岬 — 領事館等巡り — レンガ倉庫。所々で夫々のグループと、かち合ったところを見ると、夫々同じようなコースを、夫々の方法で廻ったのではないでしょう。

「風冴ゆる函館山の夜景かな」(筆者拙詠)

第3日目(10月24日)、年寄りには早起きが得意とばかり、朝飯前に朝市をひやかし見学。朝食後空港へ。空港内でお土産を物色し、ロビー内にて記念撮影後、更なる団結と来年の再会を約し解散。函館空港発13:10。60歳後半とも思えない、意気軒昂な御仁ばかりでした。ただただ脱帽。

【参加者】

佐藤(充)君、鈴木(義)君、高橋(斎)君、高橋(伸)君、中島君、星野(元)君、前野君、松本(元)君、池田夫妻、大城夫妻、太田夫妻、齋藤(龍)夫妻、塚本夫妻、早瀬夫妻、星野(陸)夫妻(京都)、松浦夫妻(浜松)、松岡夫妻、松島夫妻、村木夫妻、諸石夫妻、山田夫妻

7 期生会だより

7 期生会副会長 中村 暁(陸)

1 ホームカミングデー(HCD)

平成18年の期生会最大のイベントは、ホームカミングデーでしたが、学校側のご配慮と同窓会本部、同窓会小原台事務局及び同期生諸兄のご協力により、成功裡に実施することができました。

全国各地から同期生180名、夫人等118名の合計298名



卒業式参列

が小原台に参集し、小泉総理大臣を迎えて行われた卒業式、在校生による観閲行進、先輩卒業生による三自衛隊機の祝賀飛行等を見学して、記念すべき第50期生の門出をともに祝うことができました。

引き続き学生会館を借りて行った懇親会では、西原学校長のご臨席を得て、期生会の絆を一段と深めることができました。

当日の様子については、同窓会ホームページの写真集・卒業式の項に収録されていますのでご参照下さい。

2 日頃の活動

昨年も同窓会主催のゴルフ、テニス、囲碁大会に例年どおり選手を派遣しました。

期生会独自の行事として、毎月第1水曜日には、旧市ヶ谷会館において、有志による意見交換会を兼ねた昼食会「北斗一水会」(主催:東部支部主催)並びに俳句の愛好者による「一水句会」(代表:石田君)を開いています。

3 北斗会総会

現役員の任期も残り少なくなりましたが、期生会本部では、19年7月7日(土)に予定されている北斗会総会(3年に1回)に向けて、その準備に入りました。

今後解決していかなければならない問題もいくつかありますが、これまで同様によりきよくご協力をお願いします。

第13期生のホームページについて

13期生会HP作成委員 篠田 芳明(陸)

防衛大学校同窓会の皆さん、この紙面をお借りして13期生のホームページの紹介をしたいと思います。

13期生のホームページは平成17年4月に期生会長の山下君から「同期生相互の連絡を密にして団結と協力を推進するとともに、同窓会に13期生会の最新情報を提供し、積極的に諸行事への参加協力を行う基盤整備」の一環として「ホームページが必要」との要請があって立ち上げたものです。

早速、(陸)山下・篠田・後藤・青木、(海)牧本・牧田・小宮、(空)内山・四ツ家・中島が委員となり検討の

結果、7月にオープンしました。リンク先URLは
(<http://www.dd.em-net.ne.jp/sanae49/>) です。

中身はトップページに『国旗と校旗を守る』学生時代の同期生看板男8人の写真を配し、還暦を迎えてなお『青春時代』と変わらぬ交友を呼びかけています。左のフレームにはリンク先リストが



同期生看板男

配置され、会則、会長挨拶、役員紹介と続き、次に学生時代のアルバムにリンクしています。リンク先には懐かしい学生時代の写真を掲げています。その後の成長では、陸海空各要員別にリンク先を設け、それぞれのホームページに繋がっています。各要員のページには防衛大学卒業後それぞれ陸海空に分かれて過した文化が色濃く反映されていて楽しいコンテンツになっています。また、同窓会ホームページにもリンクしています。

同期生から投稿があると可能な限り速やかに掲載し更新していますので、同期生の皆さんは積極的に各種情報を(yshino920@dd.e-mansion.com)宛に送って下さい。また、同窓会の皆さんも上記URLを時々開いてみて下さい。(同窓会ホームページにリンク先があり、アクセスできます)

我々のホームページの特徴は学生時代の写真を多く取り入れていることで、当時の初な同期生の顔を見つけると今でも瞬時にあの素晴らしい青春時代にタイムスリップしてしまうことです。

ただ、最近の時勢柄個人情報の扱いが問題になりますので住所録等にはリンクしておりませんので御了承下さい。

16期生会だより

16期生会事務局長 石川由喜夫(陸)

定期便「小原台だより」の季節となりましたが、16期の皆さん元気ですか。

18年度から防大同窓会の各種活動行事に16期生会として参加しました。初めての「急造16期OBチーム」での参加でしたが、休日を返上し、共に汗を流し・語らい、そして次年度に向けての闘志・団結を誓い合ったところです。

結果は次のとおりです(◎印は主将を示す、敬称略)

■テニス大会(5/13、防大にて)・・・準優勝

陸：◎鴨木、青波、音野、黒川(純)、高橋(一)、

田中、古谷、増田(正)

空：高野、日暮、源

《雨の中、14期との泥試合・僅差での準優勝、来年の目標は優勝》

■囲碁大会(9/2、日本棋院市ヶ谷会館にて)

・・・Bリーグ第4位

陸：成田、新村、宮原、松浦、音野 空：◎日暮

《8名のところ、6名(2名欠員)で挑戦、Bリーグ4位は立派》

■ゴルフ大会(9/28、千葉県にて)

・・・グロス：8位、ネット：10位

陸：◎黒川(純)、池田(正)、高倉、坪井、岩尾、緒方
空：赤瀬、村岡、福島、鈴木(直)

《周囲は全て先輩の厳しい真摯な言葉の中、率先しての作業の結果、ご苦勞様》

次回以降、海上部会からの参加を得て、是非とも上位を目指しましょう。

■毎月16日の集い・・・いつも20～30名がフリーに集まっています。

・開催日：毎月16日(平日のみ開催、ただし8月16日は実施しない)

(19年は、1月、2月、3月、4月、5月、10月、11月の7回です)

・時 間：18：00に開始、約2時間程度

・会 費：約4千円

・場 所：新宿区市ヶ谷本村町4-1、「グランドヒル市ヶ谷本館1階(旧市ヶ谷会館)」「銀座ライオン安具楽」03-3260-7311

東京に出張される時は、16日に合わせると同期にたくさん逢えるかも!!

■訃報

16期生会々長を努めていた「江藤 文夫」君が、病氣療養中のところ18年10月7日に逝去されました。これまでの16期生会に対するご尽力に感謝申し上げるとともに、ご冥福をお祈り致します。

■新16期生会等の役員は、次のとおりです。

16期生会々長 折木 良一

16期生会事務局長 石川由喜夫

16期生会会計幹事 小豆野 実

陸上部会長 折木 良一

海上部会長 香田 洋二

航空部会長 小鹿 勝見

連絡担当

陸：石川由喜夫

y-ishikawa@sooshin.co.jp 090-4702-1733

海：高森 一徳

taka-626@m3.gyao.ne.jp 090-4669-1980

空：尾原 信雄

nobuo.obara.mh@hitachi.com 070-6661-7180

現在、自衛官として勤務しているのは、陸海空総数約15名となりました。

最後まで日本の為に頑張ってもらいましょう。皆で応援しましょう。

なお、皆さんへの取りまとめ・連絡は、事務局・連絡担当が行いますので気楽にお電話下さい。

■16期のホームページ紹介

防衛大学校のホームページからもアクセスできますが、情報交換の場として下記のアドレス（グループ、担当：稲葉君（空））に連絡していただくと便利です。

グループ管理者の連絡先

reimei-72net-owner@yahoogroups.jp

又はメール jp6gfa@ybb.ne.jp

25期生会だより

25期生会長 高鹿 治雄（海）

1981年（昭和56年）に小原台を巣立った我々25期生は、卒業25周年を迎えました。25期が25周年を迎えるというダブル25の貴重な節目を記念して、同期生相互の団結と懇親を更に深めるために、平成18年4月29日（金）明治記念館において防衛大学校卒業25周年記念パーティを開催しました。開催にあたっては、25周年記念行事準備委員（陸：川又君、海：徳丸君、空：野地君）をはじめ市ヶ谷周辺勤務の同期の協力を得て盛大に実現することができました。当日は、関東周辺勤務者が主体となりましたが、遠方から駆けつけてくれた者や民間で活躍されている者も含め約150名の会員が集合しました。まず、期生会総会が行われ、我々も定年を意識しなければならぬ年齢に達したことから、今後の同期生会のあり方を考慮した会則の改正、役員を選任と会計報告が参加者の満場一致で承認されました。

選任された役員は、以下のとおりです。

会 長：高鹿 治雄（海）

副会長：川又 弘道（陸）

会 計：田中 尚武（海）

監 査：古原 康孝（陸）、安藝 一（空）

理 事：川又 弘道（陸）、徳丸 伸一（海）、

森本 哲生（空）



土田令夫人を囲み

引き続き行われた記念パーティーには、来賓として故土田元防大学校長令夫人の土田絹子氏、防大同窓会会長の佐伯聖二氏及び25期生担当指導教官の中村征人氏、山口壮一郎氏や多くの会員夫人をお迎えし、総勢200名弱の盛大な宴となり、終始なごやかな雰囲気の中で旧交を温めることができました。

会の冒頭では、殉職した3名の同期生の冥福を祈り永遠の同期の絆を確認した上で、高鹿（海）25期生会長挨拶、来賓祝辞と続き、川又（陸）副会長の乾杯の音頭で始まり、まるで25年前の学生時代に戻ったように懐かしい昔話に花を咲かせました。記念パーティーは、河村君（海）、高橋君（空）の司会で進行され、会の途中においてはイラクやインド洋への派遣勤務等で会に参加できなかった同期生のビデオレター等が紹介され、同期生の国際的な活躍を参加者全員で共有しました。更に、「宴たけなわ」には、参加者が一人ずつ壇上で「顔見せ」を行い陸海空自衛隊そして民間企業等、それぞれの分野で25年間頑張ってきた『時の経過』をお互いに感じ合いました。最後に、恒例の「逍遙歌」を元応援団リーダー部の杉山君（空）の口上に引き続き参会者総員で斉唱しました。

『「25期生の25周年」という慶事』をこのように盛大に行うことができたことを心から感謝するとともに、参会者及び会員各位の今後一層の健勝を記念して、徳丸理事（海）の万歳三唱で5年後の再会を誓い合いながら閉会となりました。我が25期生会は他の期生会に勝るとも劣らぬ団結力を誇りに思っており、できるだけ同期の喜びや悲しみは25期生会の仲間で分かち合いたいと思っています。次回5年後の総会は、卒業30周年を迎え、年齢も花？の50代となり、定年は気になるものの、まだまだ健康で頑張らなければならない時だと予想しますが、お互い元気で再び会えることを楽しみにしています。



不登校の若者と共に



一輝星国際学園
学園長 中川 武夫（13期海）

1. はじめに

迷子を 慈しみつつ 渡る風

この句は筆者の現在の心境を象徴的に表現しています。すなわち、迷子とは、筆者が現在係わっている不登校生やひきこもりの若者、そして、渡る風とは、彼らと共に生き、語り、そして学ぶ筆者のことです。それでは、この句を味わいながら、筆者が当面している本学園の教育事業について防大同窓の諸兄に紹介させていただくと致します。

2. 公教育の現状

私たちが生きている世界の未来を託しているのは眼前にいる若者です。また、私たちの先祖が築き上げてきた古き伝統豊かな日本の文化や遺産を継承し、発展させる担い手も若者をおいて他には存在しないのです。それにもかかわらず、いま、若者に対する教育環境は、その質において劣悪な状況下に置かれています。藩政期の武士に対する教育に代表されるような知識ではなく品性が、頭脳ではなく魂が琢磨啓発の対象として選ばれることは現存する公教育機関にはこれを認めることはできないのであります。筆者の経験した国内外の教育機関における唯一の例外は、江田島にある海上自衛隊幹部候補生学校における教育でした。徳のかけらも無い知識を詰め込んだ浅薄な人間があたかも悪魔が振りかざす刃のように知識をひけらかしてこの世を乱しているという事実認識しない教師が行っている我が国の公教育の現状を、正しい軌道に乗せる試みほど今日、日本に求められていることはないのです。

3. ひずみ教育の淵源

戦後教育のひずみは、ダグラス・マッカーサーに率いられた連合国総司令部（GHQ）による明確な意図を持った大和魂の撲滅政策によりもたらされたものと筆者は観ています。日本国民にとって歴史上最大の不幸は、戦い

に敗れたこともさることながら、その後のGHQによる教育改革が成功を収め日本人の魂を抜き取ることに成功したということです。その結果、第二次大戦直後に生まれた世代には大和魂がその前の世代、すなわち戦争末期を果敢に生き抜いた大人たちから正しく継承されることは絶えて無かったのです。いわゆる終戦子と呼ばれている筆者は、まさに大和魂を継承することなく生きてきた最初の世代の人間の中の一人であるわけですが、筆者の小学校時代の記憶では学校において教わったことといえば、勉強の内容よりアメリカとその国民の優秀性であって、その裏返しとして日本と日本人を蔑むかのようなことばかりではなかったかと思う。が、もっと恐るべきであった事は欧米の外国人に対する強い劣等意識を幼児期から植え付けられた我々と同世代の人間が学校の教壇に教師として立つようになったことです。この結果として、欧米人の優秀性と日本人の自虐的劣等意識が古い世代から新しい世代へと連綿として伝えられてきた結果が今日我々の目の前に繰り広げられている日本社会の荒廃なのです。現在、筆者の脳裏の大半を占めている最大の関心事まさにこの点であります。

4. 本学園の特色

本学園は、ひずみをはらんだ現代の公教育の欠陥により派生し、恐るべき勢いを持って増え続ける悩み多き不登校やひきこもりの生徒や学生を慈愛の光で暖かく包み、彼らの心の奥底に潜む美質を蘇らせ、世のため、人のために尽くすことを喜びと感ずるような人に育て上げるという崇高な使命を果たすために設立されました。本学園の特色として第一番目に挙げなければならない点は、自らが自立の意欲を有するあらゆる若者にその扉が等しく開かれているということです。より具体的には、家庭の貧富、学力の高低、通学の便・不便などの要素により本学園が若者の自立への切なる願いを拒むことは決してないということです。家にお金が無い生徒に対しては、奨学金を貸与または贈与しています。学力の劣った生徒には、個別指導でその子に合った学習ペースではあるが、通常の高校や大学の修業期間（高校：6か月～3年、大学：6か月～4年）内に高卒資格や学位取得を可能にしています。本学園に入学した生徒または学生の95%以上が高卒資格や学位を最短修業期間内に取得しています。また、本学園の金沢校に通学するのが困難な生徒のために、彼らの要望に可能な限り沿うべく各地に分校を展開しています。



幼児教育実習



IT教育



卓球大会



ネイルアート実習

5. 本学園の教育システム

本学園は、学校の分類で言えば、いわゆるサポート校に属します。すなわち、小学校、中学校、高校、大学そして大学院に所属する生徒または学生を生活と学習の両面からのサポートをしています。生活面の指導は、生徒や学生のことをまるで自分のことであるかのように親身に考えている本学園の教員が、悩み、関心事などについて快く相談に応じてくれるはずです。学習面の指導は、各生徒または学生が所属し、本学園と緊密な連携を取っている文部科学省認可の高校や大学などの教育機関から送付されてくる課題レポートの作成指導や定期試験対策を本学園の教員が個別に行います。生徒または学生の週当たりの登校日数は2日から5日までの幅があって、各自の希望に応じて自由に選択することが可能です。したがって、生徒または学生にその意欲さえあれば余暇を有効に利用することにより、ホームヘルパー（1級、2級）、介護福祉士、英検、情報技術士などの資格を取得することもできます。また、余暇をスポーツや芸術活動のために費やしている生徒や学生ももちろんいます。本学園の生徒や学生には学生生活に時間的ゆとりがある点が、その特徴であるので、不登校生に限らず、自分の個性を伸ばしたいと思う若者にとっても、本学園は魅力のある教

育機関であると考えられます。

6. 結び

防大同窓会の皆様におかれましては、御自分の周りに不登校生やひきこもりになって悩んでいる若者がもしいたら、本学園のホームページ (<http://www.cciaj.com>) を是非ともご覧いただくようお願いいただければ幸いです。そして、さらに詳しい情報を得たい方には最寄りの本学園のサテライト校（長岡校、高岡校、長野校、金沢校、岐阜校）を訪れていただければと考えています。また、一ヶ所で5人以上の若者が入学希望者がいれば、日本全国どの地にも本学園分校を設置致しますので、この種の要望がありましたら是非とも筆者までお寄せいただければ幸甚の至りです。

皆様方におかれましては、混迷する若者に対する我が国の教育を正しい軌道にもどし、我々共通の愛の対象である日本の輝かしい未来を切り拓くために本学園が現在展開中の一大教育事業に対し今後とも暖かいご支援、ご協力のほど伏してお願い申し上げます次第です。

それでは、防大同窓の諸兄のご健勝とご多幸をひたすらお祈り申し上げつつこのあたりで筆を置かせていただきます。



高校3年生集合写真

支部だより

九州防大同窓会の活動概要

西部地域支部会長 山口 賢介（陸7期）

新年明けましておめでとうございます。

同窓生の皆様には、お元気でご活躍のことと存じます。九州防大同窓会も年々退職会員も増加し約1,000名になりました。九州本部も役員を充実し、活発な活動を行っています。

今年度の九州防大同窓会の活動について、紹介します。九州防大同窓会は、今年度も年間7回（約2ヶ月に1回）の本部事務局会同（内1回は各県支部長会議・現職副会長会議、各県支部事務局長会同、1回は各期代表者会議）を実施しています。

毎年2月に九州防大同窓会総会・懇親会（約200名余り参加）を行なうほか本部及び各県に担当を区分して、夏季定期訓練中の防大生の激励と、陸・海・空自衛隊記念行事へ参加しました。また例年どおり、秋空の下に、長崎・熊本からの会員の参加を得て、九州防大同窓会ゴルフ大会を行いました。

各県支部は、支部行事として、防大同窓会総会・懇親会等の活動を実施しています。各県支部独自の活動も年々活発となっています。

また、今年度は、九州防大同窓会福岡支部として「日本海海戦戦勝記念行事」に協賛（7年間続けています）の他、福岡支部の有志による福岡FM放送「国民保護法」（日曜日10：00～12：30、4回シリーズ）という番組のコメンテーターとして、出演し、非常時における自衛隊の活動等について広報しました。

九州防大同窓会総会

18年2月の同窓会総会・懇親会は、博多全日空ホテルにおいて、12期生・32期生が幹事期として、例年同様に、約200名（退職会員150名、現職会員50名）で、盛大に行われました。



ゴルフ大会（第7回）

今年度も9月29日佐賀カントリーゴルフクラブで約60名が参加し、期別対抗方式で優勝を争いました



九州防大同窓会の主な役員を紹介します

◎九州本部事務局

会 長	7 期	陸	山口 賢介
副会長（現職）	17期	陸	山口 浄秀
事務局長	9 期	陸	竹下 治雄
同（同）	24期	海	三木 伸介
同（同）	20期	空	長島 修照
総務部長	12期	陸	藤井 敬文
同（退職）	7 期	陸	伊藤 宏美
事業部長	11期	陸	中村 哲示
同（同）	9 期	空	市来 徹夫
会計部長	13期	陸	西村 長治

◎各県支部

福岡県支部長	7 期	陸	伊藤 宏美
事務局長	9 期	陸	竹下 治雄
佐賀県支部長	7 期	陸	真崎 峰夫
副支部長	10期	空	光吉 達幸
事務局長	12期	陸	田中 豊博
長崎県支部長	7 期	陸	中里 紀一
事務局長	10期	海	樋口八州太郎
大分県支部長	7 期	陸	小俣 健二
副支部長	8 期	陸	船石 雅信
事務局長	7 期	陸	澤村庄次郎
熊本県支部長	7 期	海	壇 崎次郎
事務局長	9 期	陸	佐藤 和美
宮崎県支部長	6 期	陸	後藤田壽司
副支部長	6 期	空	樋田 征治
事務局長	4 期	陸	阿万 哲士
鹿児島県支部長	9 期	陸	麓川 昭憲
副支部長	9 期	海	立元 四郎
事務局長	12期	陸	村山 文彦

文責 九州防大同窓会事務局長 竹下 治雄

広島地区支部の活動状況

広島地区支部事務局業務幹事 森田 寧（海17期）

新年明けましておめでとうございます。

防衛大学校同窓生及びご家族の皆様におかれましては、お元気でご活躍のことと存じます。

広島地区支部（呼称：広島防衛大学校同窓会）は、例年、2月に定期総会・講演会・懇親会の開催、春・秋季行事としてゴルフコンペ・テニス・ハイキングを実施し、同窓生相互の緊密な交流を推進するとともに、各種団体との交流を図っております。更に、広島県及び岩国市在籍の陸・海各部隊の実施する諸行事にも積極的に参加しております。広島支部の会員は235名（山口、島根、鳥取、愛媛県在住者を含む。）であります。

平成18年の活動状況について紹介致します。

定期総会・講演会・懇親会は、2月、呉において実施し、約70名の同窓生・家族及び海自呉地方総監道家一成海将（15期）（現 自衛艦隊司令官）をはじめとする現役同窓生が参加しました。講演会は、海自幹部候補生学校長松岡貞義海将補（18期）（現 大湊地方総監海将）の「幹部候補生教育の現状について」の講演に対し、昔を思い出したのか多くの会員から質問がなされました。懇親会は、大いに盛り上がり、恒例の学生歌と追遥歌を斉唱し終了しました。



懇親会（学生歌、追遥歌斉唱中）

春・秋季行事は、郷原GCと瀬野川GCでゴルフコンペを、陸自海田市駐屯地でテニスを、春に「錦帯橋と岩国城」、秋に「広島毘沙門天と権現山」のハイキングを実施し、延べ約250名の同窓生・家族、自衛隊OB、協力会員等が参加し、盛況裏に終了しました。



春季ハイキング（岩国錦帯橋を背景に）

部隊の実施する記念日行事、観桜会、海自幹部候補生学校入校・卒業式等計12回の行事等に、支部長及び役員の一部が参加しました。11月には、海田市駐屯地のゴルフコンペに参加し、参加30チーム中準優勝の成績を収めました。



秋季ゴルフコンペ（瀬野川CC）

また、昨年6月、第13旅団の北方協同転地演習出陣式に8名の会員が、広島防衛大学校同窓会の横断幕と幟を持って参加し、隊員を激励しました。

昨年も、呉在籍の艦艇がインド洋へ派遣され洋上補給の任務に就きました。それら艦艇の出入港に際しては、「頑張れ 国際貢献」の横断幕と幟を持って土手支部長（海8期）を先頭に呉基地へ出向き、現役同窓生のみならず派遣隊員の激励、労をねぎらいました。



インド洋派遣護衛艦「いなづま」帰国出迎え（呉基地）

また、昨年8月下旬から9月上旬にかけて呉市と江田島市は、長期間の水道水の断水という思いもよらない事態が発生し、土手支部長をはじめ会員の一部も断水被害を被りました。この事態に対して、災害派遣が発動され、海自呉地方隊（呉地方総監半田謙次郎海将（17期））及び第13旅団（第13旅団長佐藤修一陸将補（19期））を中心とする陸自中部方面隊が給水活動を実施しました。極めて迅速かつ適切な活動により、被害は最少限に抑えられ、呉及び江田島市民から大いに感謝されました。

自衛隊は、国の平和と安全はもとより、国内においては災害派遣、海外においては国際貢献という重要な任務を背負い各地で活躍しております。

これらの任務遂行において、現役同窓生は、その中核として勤務しております。これら同窓生に対し深甚なる敬意と感謝の気持ちを陰ながら送っております。我々民間人となったOBは、現役同窓生の任務完遂と無事の帰国を祈念する以外彼らに声援を送る方策を持っていないのが現状です。

今後も、ささやかではありますが広島支部としてできるかぎりの自衛隊支援を継続していくこととしております。

今年も、広島支部は積極的に活動していく予定です。

活動状況

岡山地区支部業務幹事 永岑 富彦（陸10期）

当支部は、平成15年12月に発足しました。

現在の会員数（OBのみ）は、85名（内訳 陸：55名、海：11名、空：19名）です。以下、今年の活動現況を紹介します。

1 定期総会及び懇親会

7月30日（日）岡山市内で、OB会員32名及び現役会員2名の出席の下、定期総会及び懇親会を実施しました。前年度の事業報告等と今年度の事業計画等を審議した後、役員改選を実施しました。

新しく選出された役員（任期2年）は、下記のとおりです。

会 長	高橋 正憲（6期 空）
副会長	築山 昌平（8期 陸）
幹事長	坪井 英三（10期 陸）
幹 事	
（業務幹事）	永岑 富彦（10期 陸）
（釣り担当）	竹村 洋介（12期 陸）
（ゴルフ担当）	武内 毅（13期 空）
（総会担当）	頼経日出男（13期 海）
（名簿担当）	岸本 久昭（16期 陸）
（名簿担当）	森 幹（19期 陸）
会 計	渡辺 剛（11期 陸）
監 査	土光 正純（5期 空）
	畝田 尚正（9期 海）

総会に引続き実施された懇親会では、自衛隊岡山地方協力本部長藤本1佐（27期 陸）、及び陸上自衛隊三軒屋駐屯地司令天雲1佐（18期 陸）から、それぞれの職務に係る現況について、詳細な説明がありました。

2 ゴルフ大会

9月30日（土）岡山ゴルフ倶楽部（帯江コース）で、9名の参加者を得て、コンペを実施しました。

優勝者（ダブルペリア方式）は山本進氏（9期 陸）、またベストグロスは、神田克正氏（7期 空）のスコア82 [39・43] でした。

3 釣り大会

現時点では、未実施です。

主要な行事は以上ですが、今後、高橋新会長の下、更に会員相互の親睦・交流を深めるとともに、現役会員及び防大父兄会員等との連携を図って参ります。

現況と課題

関西地区支部会長 羽藤 忠和（陸9期）

防大同窓会の皆さん、初めまして私は平成18年2月から関西防大同窓会の会長を拝命しております9期陸の羽藤です。皆様にはそれぞれの立場・持ち場に於かれまして「白色白光、赤色赤光」で人生の大道を澆刺と歩んでおられることと拝察しお慶び申し上げます。私、命じられた期間精一杯努力するつもりですので皆様の大所高所からのご指導ご鞭撻をいただけますことをお願い申し上げます。

現 況

関西防大同窓会は、「会員相互の親睦」「母校の発展への寄与」「社会活動に寄与すること」を目的として発足、足掛け8年目を迎えております。この間役員はもちろん会員各位の積極的な努力により、会の活性化が図られてきたと自画自賛しております。具体的な活動としまして、総会、講演会・研修会をはじめとして、古刹探訪・史跡研修・カッター大会への参加、テニス・ゴルフ活動等を実施してまいりました。18年度の講演会は、イラン情勢が緊迫する状況でありましたので、私（会長）のイラン防衛駐在間の経験を活かし、イランイスラムは「玄関まで」と「米国の態度はダブルスタンダードであるので中東に介入する恐れはあるが、日本の経済にとってイラク事案とは地勢学上で比較にならないほど極めて重要な悪影響を及ぼすので日本政府としては熟慮対応を期待したい」旨の講演を実施させていただきました。

これらの活動状況につきましては、前会長の7期航空の中氏が編纂しています関西防大同窓会ホームページにその都度掲載している通りです。ぜひ、ご高覧ください。

文化活動開始

会の更なる活性化を図るため今年から文化活動「詩吟教室」「書道教室」「腰痛110番」を開始しました。現在「詩吟教室」は月2回、「書道教室」は月1回、「腰痛110番」は2ヶ月に1回計画実行しておりますが、才能・手腕に優れ経験豊富な講師のもと、生徒達はジュニア並に血潮たぎらせながらも和気藹々と活動しております。詩吟教室は13期盛田君のご母堂（国風流上師範）を、書道教室は13期鶴田君の令夫人（読売書道会幹事）、腰痛110番は2期の鈴木建臣氏（六湛寺健康センター所長）を講師としてお願いしております。なお、本活動の開始のため13期盛田君の筆舌につくせぬ尽力があったことを紹介させていただきます。

課 題

関西防大同窓会の課題は、会費納入率の向上、経費と個人情報絡みで会員名簿の発行、目的の一つである「社会活動への参加」をどうするか等いろいろある中で、永

遠の課題かも知れませんが「現役会員の会活動への積極的参画」をどうするかが最大の課題であると考えております。課題克服のため、①現役も関西防大同窓会の一員であることを認識してもらうこと ②活動内容を周知徹底すること ③活動内容が現役にとっても魅力的なこと ④現役が参加し易い場所の選定が重要であると考え、既に述べました活動の他現在実施している事項は次の通りです。

①現役を副会長に指名「総監部幕僚長（陸）、舞鶴地方総監部幕僚長（海）、幹部候補生学校副校長（空）」

②行事の情報提供

- ・総監部等の広報を通じて上・下期行事を部隊に広報
- ・部隊訪問機会がある会員による訪問先での広報

③新規交代副会長等に対する広報

行く手はるけくいばらの道かなと考えておりますが千里の道も一歩から、今後とも地道な努力をしていく所存ですので、この課題に成功されている支部があればご教授をお願いいたします。

私の心境を紹介する歌を引用し拙文を終わらせていただきます。

岩もあり 木の根もあれど さらさらと
たださらさらと 水は流れる （甲斐和里子）



詩吟教室



書道教室



腰痛110番



活動状況

北陸支部事務局長 西川 清（陸15期）

平成18年8月5日（土）、第5回総会を開催いたしました。昨年に引き続き今年も現役の学生や学生の父兄も講演会・懇親会に参加してもらえるようにとの意見もあり、お盆の時期に設定いたしました。実際には昨年同様、現役の学生の参加はありませんでしたが、学生の父兄2名の参加がありました。講演会の講師は、福井地方協力本部の千田本部長にお願いし、防衛駐在官の貴重な体験談などを拝聴いたしました。特に今年は、8月3日から7日までの5日間、珠洲市で「第14回日本ジャンボリー」が開催され、14普連長・石川地方協力本部長ほか現役の方々の支援や小松基地司令の交代と重なってしまいました。

懇親会も例年どおり、学生歌斉唱からはじまり、追遠歌斉唱に終わるパターンですが、現役自衛官10名、OB19名、来賓3等名の参加により、和気藹々と歓談もはずみ有意義な懇親会となりました。

なお、今回役員の交代がありましたので、お知らせいたします。

支部長 久保 正佳（3期、陸）→濱谷 隆平（6期、陸）

主な新役員は、次のとおりです。

名誉会長 久保 正佳（3期、陸）

相談役 吉村 健思（3期、海）、内島 靖雄（4期、陸）、真館 誉（5期、陸）

副会長 田中 奨（6期、陸）、籠 宗信（7期、陸）、滝尾 敏顕（9期、陸）

理事 井上 博（3期、陸）、中西 吉弘（4期、陸）、鉄山 力夫（5期、陸）、田中 省三（6期、陸）、千川 康夫（7期、陸）、山岸 甚義（8期、陸）、小笠原 晃（9期、陸）、辻 政晴（10期、陸）、新谷 照雄（12期、陸）、中村 健造（13期、空）、龍岡 隆昭（14期、陸）、作本 隆（15期、空）、羽田 良一（16期、陸）

事務局長 西川 清（15期、陸）

また、今年度は、何か一つボランティア活動等の事業を計画したいと思っています。



追遠歌

防大同窓会東北支部の活動

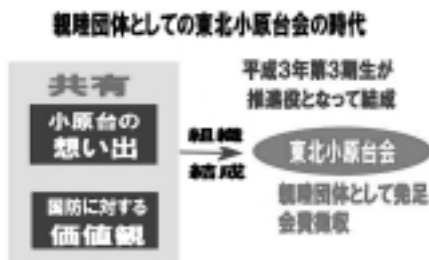
東北地域支部事務局 勝 美治（陸13期）

防大同窓会東北支部は、今、新たな組織作りに、取り組んでいる。

いわば、親睦団体の「東北小原台会」から防大同窓会の地方組織である「防大同窓会東北支部」への脱皮である。「東北防大同窓会」の中核を担う「東北小原台会」の変遷を見ると、純粋な「親睦団体としての時代」、「防大OB会として東北防大同窓会と併存した時代」そして、今取り組んでいる「OB同窓生の地域組織として機能しなければならない時代」に区分できるように思える。



1 親睦団体としての時代



世俗世界から隔離されて過ごした小原台。

勉学に、クラブ活動に勤しんだ4年間。

当時は、それが、どれほど貴重な時間だったか解らなかった。

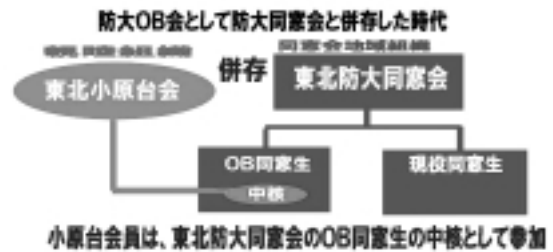
社会を知り、年月を経るに従って、珠玉の輝きを増してくる。

人間形成に大きな影響を与えた小原台の思い出と、国防に対する共通の価値観を共有する有志の同窓生が動き出した。

平成3年、自衛隊を退職した第3期生が中心となって、「東北小原台会」を結成した。

会費を集める親睦団体として機能し始めた。東北小原台会の特徴は、親睦に徹し、決して、表面にでなかったことであろう。それは、まさに、自衛官時代のスタンスである。防衛大学卒業生が、自衛隊の中核であるという責任と自負心を持っていたとしても、防大出身者だけで、国の守りはできないという謙虚で抑制的な態度であった。会員は、小原台で過ごした心の絆は、持っていたとしても、社会活動なり、親睦活動をするときは、会を離れて個人として参加した。社会活動なり、親睦活動で、会員が中核を担う立場であっても、会員は、東北小原台会の枠を超えて行動した。

2 防大OB会として東北防大同窓会と併存した時代



母校の50周年を期に、自衛官の現役と自衛官を退職したOBが一体となった東北防大同窓会が発足した。

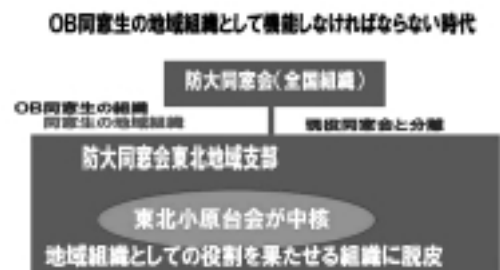
会費を徴収し、防衛大3学年の部隊実習を支援したり、防衛大入校予定者の激励、各駐屯地の防大同窓会活動の支援など物心両面に渡る支援活動に取り組んだ。

その特徴は、防大同窓会を表面に出して活動したことである。その間も、東北小原台会は親睦組織として存続しつづけた。

東北小原台会のメンバーは、東北防大同窓会のOB同窓生の中核として、個人として参加する一方、会費徴収については、東北小原台会が担って、東北防大同窓会に納入した。

東北小原台会は、発足以来、持っていた表面にでない親睦組織としてのスタンスを保持し、東北防大同窓会と併存して、その活動を支援した。

3 OB同窓生の地域組織として機能しなければならない時代



防大同窓会の見直し検討会の結論を経て、現役同窓生組織とOB同窓生組織が分離することになり、東北でも検討がなされ、従来の東北防大同窓会が解散、OB同窓生による東北防大同窓会が東北小原台会に引き継がれることになった。そして、会長には、東北小原台会の会長である袖井孝氏（防大陸9期）が就任した。

総会で、「東北小原台会」を中核として、防大同窓会東北地域支部の活動するという方針が採択され、名称に、（東北小原台会）を残すことになった。それは、「小原台で過ごした青春時代の思い出と共通した価値観が全てである」という東北小原台会発足の精神を踏襲しようとする会員の共通の思いからきたものであると思われる。しかしながら、親睦組織が、同窓会の地域組織として機能することによって起きる問題点もある。幹部候補生学校で会費を納めた防大同窓会会員の把握と、伝統的に個人の意志に基づいて親睦を図ってきた東北小原台会との折り合いである。18年度、防大大同総会東北地域支部は、その課題に取り組んでいる。強い絆に結ばれた親睦団体としての伝統と謙虚で抑制された活動力を保持しつつ、地域組織としての役割を果たしていかなければならない。地域支部として、袖井会長の下、地道な作業に取り組んだところであるが、特に、困難を極めているのが、会員の所在の把握である。将来的には、県単位の地区支部結

成もある。

防大同窓会東北地域支部は、色々な変遷を経てきて、同窓生から知事を輩出する段階に至った今、地域支部の役割を果たすという新たな課題にも直面しているが、「東北小原台会」結成時の親睦団体としての活動精神を保持

し続けることによって、会員が絆で結ばれつつも枠を超えた活動が助長され、逆説論的にいえば、防大同窓会東北支部（東北小原台会）が社会性を帯びてくるだろうと思われる。

平成17年度防衛大学校同窓会決算報告

平成18年3月31日
〔単位：円〕

項 目			17年度当初予算	17年度実績
一 般 会 計	収 入	会費（49期生等）	18,740,000	19,156,310
		預貯金利息	1,380,000	1,376,146
		特別会計からの移管	700,000	219,494
		同窓会名簿売り上げ		2,178,500
		雑収入	20,000	44,400
	収 入 合 計		20,840,000	22,974,850
	本 部	機関誌の発刊	3,700,000	3,327,838
		代議委員会・懇親会の開催	500,000	600,413
		総会・懇親会の開催	700,000	869,906
		慶弔（弔電・供花等）	400,000	522,065
		同窓会名簿の維持	350,000	465,920
		スポーツ等交流会の実施	150,000	150,000
		防大卒業留学生との交流	200,000	110,650
		中期事業の検討	200,000	83,320
		小 計	6,200,000	6,130,112
	期生会	HCDの実施	400,000	300,210
		期生会HP開設助成	150,000	100,000
		小 計	550,000	400,210
	防 大	開校記念祭支援	2,000,000	2,000,525
		校友会対外活動支援	1,000,000	917,950
		競技会支援（記念品）	530,000	574,664
		顕彰碑献花式支援	100,000	143,227
		期生会発足等支援	200,000	200,000
		安全保障講座助成	100,000	100,210
		小 計	3,930,000	3,936,576
	出	その他の事業	750,000	0
		事業経費小計	11,430,000	10,466,898
	維持管理	事務費	900,000	580,261
		通信費	600,000	325,814
		交通費	650,000	559,840
		会議費	600,000	476,249
		小原台事務局運営費	100,000	99,258
		事務員雇用費	2,000,000	2,000,000
		本部事務局室賃貸費	2,900,000	2,821,811
		その他の経費	100,000	335,629
維持管理費小計		7,850,000	7,198,862	
予備費		1,500,000	0	
支 出 合 計		20,780,000	17,665,760	
積立金に繰り入れ		60,000	5,309,090	
支 出 総 合 計		20,840,000	22,974,850	
特 別 会 計（MCI）	収 入	前年度からの繰越	29,397,086	29,397,086
		預貯金利息	7,000	13,024
		一般会計からの移管		116,135
		合 計	29,404,086	29,526,245
	支 出	MCI事業及びHPの管理運用態勢	1,000,000	1,136,425
		謝金等	1,800,000	608,925
		同窓会システムの維持経費	200,000	129,674
		通信費及び事務費	200,000	16,590
		交通費	300,000	184,320
		予備費	1,000,000	0
		支出合計	4,500,000	2,075,934
		次年度への繰越	24,904,086	27,450,311
	合 計		29,404,086	29,526,245

会費納入状況

18.11.17 現在

期別	会員数	完者 納数	完率 納%	未完納者数				期別	会員数	完者 納数	完率 納%	未完納者数			
				陸	海	空	計					陸	海	空	計
1	339	320	4	11	6	2	19	27	392	381	97	8	1	2	11
2	359	347	97	8	2	2	12	28	455	424	93	17	8	6	31
3	484	452	93	17	12	3	32	29	397	363	91	17	7	10	34
4	465	437	94	20	7	1	28	30	415	348	84	48	13	6	67
5	529	483	91	26	11	9	46	31	436	414	95	15	6	1	22
6	478	432	90	37	6	3	46	32	410	360	88	31	13	6	50
7	503	460	91	29	7	7	43	33	453	381	84	45	19	8	72
8	467	420	90	34	8	5	47	34	432	377	87	40	9	6	55
9	498	447	90	35	6	10	51	35	502	485	97	9	5	3	17
10	498	453	91	27	8	10	45	36	358	348	97	6	2	2	10
11	495	448	91	28	8	11	47	37	388	351	90	16	7	14	37
12	466	414	89	31	9	12	52	38	342	268	78	60	10	4	74
13	468	419	90	31	9	9	49	39	351	323	92	8	11	9	28
14	492	457	93	20	2	13	35	40	393	333	85	34	21	5	60
15	463	448	97	9	3	3	15	41	415	373	90	24	15	3	42
16	428	404	94	9	4	11	24	42	417	376	90	19	12	10	41
17	498	453	91	20	11	14	45	43	437	390	89	23	16	8	47
18	423	397	94	9	7	10	26	44	389	225	58	119	41	4	164
19	446	412	92	14	18	2	34	45	357	143	40	149	21	44	214
20	383	352	92	17	3	11	31	46	367	226	62	75	7	59	141
21	491	470	96	12	3	6	21	47	401	351	88	32	11	7	50
22	475	413	87	30	9	23	62	48	439	389	89	24	14	12	50
23	412	390	95	8	8	6	22	49	*294	294	100	0	0	0	0
24	451	418	93	8	18	7	33		325	294	90	26	4	1	31
25	425	402	95	11	4	8	23	50	*323	320	99	0	0	3	3
26	510	471	92	26	7	6	39		369	320	87	27	13	9	49

会員数の項：会費納入対象者（留学生を除く防大卒業者数）。

49・50期生の欄：*印の項は、幹候校入校者に対する数値。

会費納入のお願い

防衛大学校同窓会事務局長 佐藤 哲

17年度は49期生の陸・海・空幹部候補生学校在学者全員に完納していただきましたが、18年度も50期生幹候校在学者全員が完納の見込みです（表参照）。衷心よりお礼申し上げます。

また、その他の期においても納入率の向上のために、期生会長及び代議員の皆様にご助力をいただき、成果が出ております。重ねて御礼申し上げます。

同窓会事務局では、「あり方検討」の一環として同窓会の経済的な基盤を更に固めるべく、18年度から学校等を訪問し、会費納入促進活動の推進に努めております。

同窓会活動の趣旨を理解して頂き、会費未納の方（事務局で把握しておりますので下記連絡先にご確認下さい。）には、次により会費納入をお願い申し上げます。

納入先 郵便局の場合：口座番号 00260-5-□□24826（百万及び十万の桁は無記入）

加入者名 防衛大学校 同窓会

通信欄 期別、要員別及び部隊名（現役の場合）を記入

振込経費 120円

銀行の場合：三井住友銀行 飯田橋支店 口座番号：1270680

防衛大学校同窓会 経理部長 山根 峯治

なお、銀行振込の場合は、納入者の確認及び完納証等の発送のため、必ず振込者氏名、住所、期別、要員別、振込期日をeメール、Fax、電話等で下記にご連絡下さい。

連絡先 同窓会本部事務局 〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2
Tel/Fax 03-3351-8910 (自即電話 8-6-28895)
eメール honbu@bodaidsk.com

【参 考】

普通会費 防大本科卒業生

卒業時の3尉俸給月額(1号俸)の1/4(千円未満切捨)

防大研究科卒業生(一般大学卒業者)

卒業年度の3尉俸給月額(1号俸)の1/8(千円未満切捨)

延滞金 1,000円×(完納年度-3尉任官年度又は研究科卒業年度)

(防衛大学校同窓会会費に関する細則より)

会費算出例:45期生で過去に分納がない場合

普通会費 60,000円、完納年度 19年度、3尉任官年度 13年度(14.3)

19年度納入額 60,000円+1,000円×(19-13)=66,000円

(詳細は同窓会事務局までお問い合わせ下さい)

同窓会本部・支部等の役員紹介

[平成18年度同窓会本部役員]

会 長	佐伯 聖二	7(海)	総務部(総務)	安井 剛	16(陸)	事業部	中治 一秀	14(空)
副会長兼理事長	竹河内捷次	9(空)	総務部(機関誌/HP)	佐田 重夫	15(陸)	同	山本 博秋	16(海)
副 会 長	新井 宏	9(陸)	同	池田 茂実	16(空)	同	山本 公志	12(陸)
理 同 事	藤田 幸生	9(海)	総務部(桜華会)	吉田ゆかり	40(空)	事務局		
同 同 事	山田 道雄	11(海)	人事GP			事務局HP技術担当	荒木 紀夫	8(空)
同 同 事	佐藤 哲	12(陸)	人事GP長	寄田 修	14(陸)	事務局員	塩川 太恵	
同 同 事	広瀬 紀雄	12(空)	人事GP(空)	徳田 正行	15(空)			
同 同 事	奥山 繁樹	14(陸)	人事GP(陸)	高倉 文敏	16(陸)	同窓会小原台事務局員		
同 同 事	寺崎 芳治	20(陸)	人事GP(海)	前川 真	16(海)	事務局長	1空佐 川上 潔	17
同 同 事	泉 三省	22(海)	経理部			事務局長補佐	1陸佐 高橋 丈雄	23
同 同 事	飯田 雅典	21(空)	経理部長	山根 峯治	14(陸)	顧問	2海佐 新開 仁司	22
同 同 事	尾頭 誠	8(空)	経理部長補佐	三好 光男	15(空)	渉外部長	2陸佐 大崎 直紀	22
同 同 事	中埜 和男	10(陸)	経理部	平田 昭文	15(海)	総務部長	2海佐 山下 啓治	23
同 同 事	長谷 勇	11(海)	同	田代 満次	16(陸)	総務係長	3陸佐 末継 智久	39
本部事務局員			事業部			総務係	1海尉 正木 一成	43
事務局			事業部長	小島 健二	14(空)	広報係長	3陸佐 佐藤伊知郎	37
事務局長	佐藤 哲	12(陸)	事業部長補佐	鈴木 健	15(陸)	広報係	1陸尉 黒木 崇	42
プロジェクト			事業部	松永 寛	15(海)	事業部長	2空佐 格和 郁夫	22
プロジェクト担当	後藤 英二	13(陸)	同	坪井 寛	16(陸)	企画係長	3海佐 堂蘭 真作	36
プロジェクト担当	青木 吉則	13(陸)	同	小池 重倫	16(陸)	企画係	1空尉 加藤 雄一	42
プロジェクト担当	小宮 哲夫	13(海)	同	中村 吉廣	16(空)	事業係長	3陸佐 平位 大	36
総務部			同	赤瀬 公	16(空)	事業係	1空尉 谷田 雅彦	44
総務部長	小津 光由	14(陸)	MCI事業部					
総務部長補佐	飯島矢素夫	15(陸)	事業部長	井本 尚英	9(陸)			
			事業部長補佐	新治 毅	13(空)			

[地域支部等役員(平成18年度)]

北海道地域支部 支部長	工藤 義弘	12 陸	関西地域支部 業務幹事	新見 泰朗	17 陸	長崎地区支部 業務幹事	樋口八洲太郎	10 海
東北地域支部 支部長	袖井 孝	9 陸	岡山地区支部 支部長	成久 洋之	3 陸	熊本地区支部 支部長	壇 崎次郎	7 海
東北地域支部 業務幹事	勝 美治	13 陸	岡山地区支部 業務幹事	永岑 富彦	10 陸	大分地区支部 支部長	小俣 健二	7 陸
北陸地域支部 支部長	久保 正佳	3 陸	広島地区支部 支部長	土手 義孝	8 海	宮崎地区支部 支部長	後藤田壽司	6 陸
北陸地区支部 事務局員	西川 清	15 陸	広島地区支部 業務幹事	森田 寧	17 海	宮崎地区支部 事務局員	阿万 哲士	4 陸
栃木地区支部 支部長	鯉沼 義則	1 陸	九州地域支部 支部長	山口 賢介	7 陸	鹿児島地区支部 支部長	龍川 昭憲	9 陸
栃木地区支部 業務幹事	三代 武徳	8 陸	九州地域支部 業務幹事	藤井 敬文	12 陸	鹿児島地区支部 事務局員	福島 卓	11 陸
群馬地区支部 支部長	日野 繁	2 陸	福岡地区支部 支部長	伊藤 宏美	7 陸	沖縄地域支部 支部長	藤井 建吉	7 陸
東海地区支部 支部長	森 敏	5 空	佐賀地区支部 支部長	真崎 峰夫	7 陸	小原台クラブ 支部長	岩崎 俊雄	9 陸
東海地区支部 事務局員兼業務幹事	佐藤裕紀夫	12 空	佐賀地区支部 業務幹事	田中 豊博	12 陸	小原台クラブ 総務部長	山下 啓治	23 海
関西地域支部 支部長	羽藤 忠和	9 陸	長崎地区支部 支部長	中里 紀一	7 陸			

期生会会長・代議員名簿

18年12月1日現在

期別	会 長				代			議 員			業務幹事 (期生会)								
					陸			海							空				
1	森	野	安	弘 (陸)	相	澤	昭	彦	三	浦	衛	政	狩	圭	亮	鈴	木	英	夫 (陸)
2	吉	崎		格 (陸)	吉	崎		格	水	野	信	杉	野	秀	男	中	山	隆	志 (陸)
3	藤	村	憲	司 (陸)	後	藤	正	和	松	本	昭	山	下	民	夫				
4	田	中	厚	彦 (空)	大	久保		浩	辻	川	利	嶋	崎	忠	雄	加	藤	哲	朗 (陸)
5	松	島	悠	佐 (陸)	青	山	利	雄	藤	塚	耕	近	藤	五	朗	浅	野	勇	藏 (陸)
6	夏	川		也 (海)	池	田		勝	福	木	啓	手	光	英	毅	手	光	義	毅 (空)
7	落	合		峻 (海)	大	塚	忠	宏	高	方	基	大	杉	祐	司	出	來	英	彦 (海)
8	藤	縄	祐	爾 (陸)	廣	田	英	雄	日	光	幸	藤	原	勝	之	廣	田	雄	彦 (陸)
9	磯	島	恒	夫 (陸)	小	嶋	捷	利	大	田	勝	鈴	木	一	嘉	林		茂	彦 (陸)
10	野	竹		隆 (空)	嶋	野	隆	夫	坂	東	征	兒	玉	秀	正	兄	玉	秀	正 (空)
11	石	川		亨 (海)	内	村	彰	和	吉	原	義	赤	羽	益	三	阿	保	文	敏 (陸)
12	先	崎		一 (陸)	前	田		稔	上	村	堯	寺	田	治	夫				
13	山	下	輝	男 (陸)	関		芳	雄	平	井	良	花	岡	芳	孝	山	下	輝	男 (陸)
14	吉	田	一	成 (空)	石	井	義	博	斎	藤	幹	稲	葉	憲	一	佐	藤	誠	喜 (陸)
15	道	家	良	一 (陸)	佐	伯	由	夫	小	林	夫	江	口	啓	三				
16	折	木		陽 (陸)	石	川		陽	豆	野	美	鈴	木	直	人				
17	鈴	木		俊 (陸)	鈴	木		毅	河	野	登	浅	見	政	博				
18	大	西	正	健 (陸)	藤	野		健	高	田	幸	笠	原		久				
19	酒	井	貞	夫 (陸)	酒	井	智	聰	宮	浦	弘	岩	崎	康	茂	榊	枝	宗	男 (陸)
20	佐	藤		清 (空)	西	村	重	樹	加	藤	耕	宮	園	芳	彦				
21	彌	田	寿	広 (陸)	竹	田	丈	嗣	飯	尾	俊	奥	村	正	樹				
22	宮	下	豊	一 (陸)	盛	一	親	裕	山	口		福	井	勝	明	田	上	安	男 (陸)
23	岩	本		均 (陸)	盛	岩	崎	朋	細	谷	正	清	藤	真	則	竹	谷	修	男 (陸)
24	高	橋	治	雄 (海)	櫻	木	正	夫	槻	木	二	岩	成	浩	一	櫻	木	正	朋 (陸)
25	高	鹿		夫 (陸)	田	中	良	一	徳	丸	一	吉	田	金	介				
26	屋	代	律	茂 (陸)	増	田	潤	茂	大	保	郎	佐	木	弘	也	伊	藤	正	顯 (海)
27	小	林		人 (陸)	小	林		人	副	島	志	々	浦	容	彦	小	林	正	茂 (陸)
28	田	浦	正	夫 (陸)	田	浦	正	之	畠	野	一	大	塚	和	進	時	浦	正	人 (陸)
29	馬	場	邦	彦 (陸)	中	村	浩	繁	中	尾	久	遠	上	紀	彦	時	藤	和	夫 (空)
30	堀	切	光	光 (陸)	山	崎	直	樹	正	實	彦	小	田	誠	郎				
31	高	山	博	典 (空)	山	根	和	典	今	村	弘	有	村	吉	典				
32	榊	原	吉	陽 (空)	池	田	寿	一	平	井	和	榊	原	正	敏				
33	中	塚	千	知 (空)	山	根	勝	司	真	殿	彦	沖	野	卓	人				
34	佐	藤	信	正 (空)	大	谷	博	好	福	田	明	小	原	竜	治				
35	稲	月	秀	好 (陸)	中	足	達	隆	保	科	之	右	田	隆	行				
36	足	達	和	之 (空)	小	森	川	康	塩	崎	薰	寺	崎	和	好				
37	宇	佐	浩	太郎 (陸)	小	湯	本	兼	浦	口	吾	宇	美	豊	英				
38	石	井	兼	徹 (海)	小	澤	下	学	濱	崎	幸	霜	田	功	二	山	崎	武	志 (空)
39	湯	下		幸 (海)	不	武	破	悟	平	田	彦	竹	岡	大	吾				
40	清	水	和	克 (陸)	武	澤	田	克	川	野	邦	石	引	大	輔				
41	堤	田		淳 (空)	澤	鈴	木	実	小	河	喜	中	谷	主	税				
42	武	田		典 (海)	青	山	岡	祐	戸	尾	竜	山	切	靖	理				
43	鎌	田	秀	明 (陸)	石	岡	田	樹	阿	永	智	岩	田	洋	弘				
44	高	橋	秀	岳 (海)	清	桐	直	幸	岡	部	俊	坂	林	悠	平				
45	庄	司	憲	太郎 (陸)	納	谷	裕	弘	石	澤	健	寺	須	真	花				
46	原	田	嵩	一 (海)	益		高	希	笠	川	祐	那	藤	剛	吾				
47	吉	水	剛	史 (空)				宇	柏	原	一	齋	上	竹	史				
48	和	田		浩 (空)					小	木	己	山	部		浩				
49	山	上							八	沼		阿							
50	阿	部																	

名簿管理に関するお知らせ及びお願い

I 利用目的及びプライバシーポリシー

17年4月の個人情報保護法施行に伴い、同窓会名簿管理のあり方について、次のとおり利用目的を明確化するとともにプライバシーポリシーを確立しました。名簿管理は同窓会存立の基本的要件であり、会員皆様の一層のご理解ご協力をお願い致します。

1 利用目的

同窓会本部は、同窓会設立以来、会員の相互親睦、母校への支援、防衛思想の普及等を目的に各種事業を推進するなど、同窓会の充実発展に努力してまいりました。同窓会名簿は、これらの各種事業活動を推進するため不可欠でありかつ同窓会存立の基本であると考えております。

同窓会本部では、同窓会のさらなる充実発展のため、次の目的で皆様の個人情報を利用又は提供させて頂きたいと考えております。

- (1) 同窓会各種事業推進のための連絡
- (2) 機関誌「小原台だより」の刊行（業者に郵送先を提供）
- (3) 会員の慶弔の実施
- (4) 期生会並びに校友会、教務班等グループ活動への協力
- (5) 地域支部等の活動への協力

2 プライバシーポリシー

個人情報の取り扱いにあたっては、情報保護の重要性を深く認識し、個人情報に関する法令、その他の規定を遵守するとともに次のプライバシーポリシーに従い皆様の個人情報の適切な保護に努めてまいります。

- (1) 会員皆様の個人情報は、利用目的の範囲内で収集、利用させていただきます。
- (2) 法令等に規定する場合を除き会員皆様の承諾なしに目的外の利用及び提供はいたしません。
- (3) 会員の皆様から、個人情報の照会、修正、削除等を希望される場合は、同窓会本部事務局総務部担当者へご連絡いただければ、速やかに対応させていただきます。
- (4) 個人情報へのアクセス、破壊、改ざん及び漏洩などしないように適切に管理します。

II 会員の異動等に伴う名簿修正

従来、名簿管理は防衛庁関係部署のご協力による情報提供と部外委託により実施していましたが、個人情報保護法制定に伴い、防衛庁関係部署からの情報入手と部外委託が困難となりました。

このため、各期生会のご協力なしに名簿の維持管理は出来ない状況にあります。平成16年から名簿の修正は期生会代議員にお願いして参りましたが、代議員への負担が過大になる等の問題がありました。前年度からは、代議員の負担軽減と送達の効率化のため要修正項目を厳選し削減するとともにメールの併用等送達手段の多様化を図りました。

今年度も、期生会代議員の皆様には8月の定期異動等を基準に名簿の修正をお願いしましたが、ご多忙な時期にもかかわらずご支援ご協力ありがとうございました。次年度以降も8月の定期異動等を基準に10月下旬までに年一回の修正をお願いすることになりますので引き続きご支援ご協力をよろしくお願い致します。

また、会員の皆様には各期生会代議員への積極的ご協力をよろしくお願い致します。

III 同窓会ホームページを活用した異動連絡等

最近のインターネットの普及は目覚ましいものがあり同窓会としてもインターネットの積極的活用を図っております。インターネットを通じた会員の異動通知等は、正確性、迅速性及び安全性はもとより、管理の効率性からも極めて有効であると考えています。そこで、年1回の定期修正の補完的手段として、同窓会ホームページに「異動連絡・ご意見表」の項を設け、住所、勤務地の異動及び本部に対するご意見等をインターネットを通じて連絡できるように致しました。各期生会・会員皆様の積極的な活用をお願いいたします。

防大同窓会ホームページ：「お知らせ」→人事Gp「異動連絡」または「異動連絡・ご意見表」

本部事務局長 佐藤 哲



卒業式パレード

平成18年度防衛大学校同窓会懇親会等の御案内

平成18年度同窓会講演会・懇親会を下記のとおり開催いたします。

(本年度は、代議委員会が行われ、総会は行われません。)

ご出席を賜りたくご案内申し上げます。

- 日 時：平成19年2月10日(土) 17:20～20:30
- 場 所：グランドヒル市ヶ谷
新宿区市谷本村町4-1 (TEL: 034-32684-0111)

●懇親会費：5,000円

1. 講演会：17:20～18:20
講師：前防衛大学校校長 西原 正 氏
演題：「最近の国際情勢」
2. 懇親会：18:30～20:30

参加される方は、同封の返信用「はがき」にて平成19年1月22日(月)までにお申し込み下さい。(いずれにも参加されない方の返信は不要です。)

●代議委員会は、平成19年2月10日(土) 15:30～17:00

編集 佐田重夫・池田茂実
印刷 (株)エイコープリント

防衛大学校同窓会本部連絡先

〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2

●局 線 TEL・FAX 03-3351-8910 ●専用線 TEL・FAX 8-6-28895
E/M: honbu@bodaidsk.com